

町民参加の町史づくり



# 竹富町史だより

第38号

2016年9月18日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

TEL (0980) 82-6191

## 目 次

第1回竹富町史島じま編シンポジウム『竹富町史 第六巻 鳩間島』	1
近世鳩間島の民衆生活と通耕 —『竹富町史 第六巻 鳩間島』の知見を加えて—	得能壽美…2
昭和40年代 鳩間島の祭祀 一宮良高弘寄贈資料より—	大城 學…12
鳩間島に関する資料	16
島に貢献した3人の先生方	吉川英治…27
戦争と黒島	玻座真 武…28
〈資料紹介〉 波照間小学校沿革誌 ②	36
竹富町史の刊行物一覧	44
編集後記	45

表紙の写真

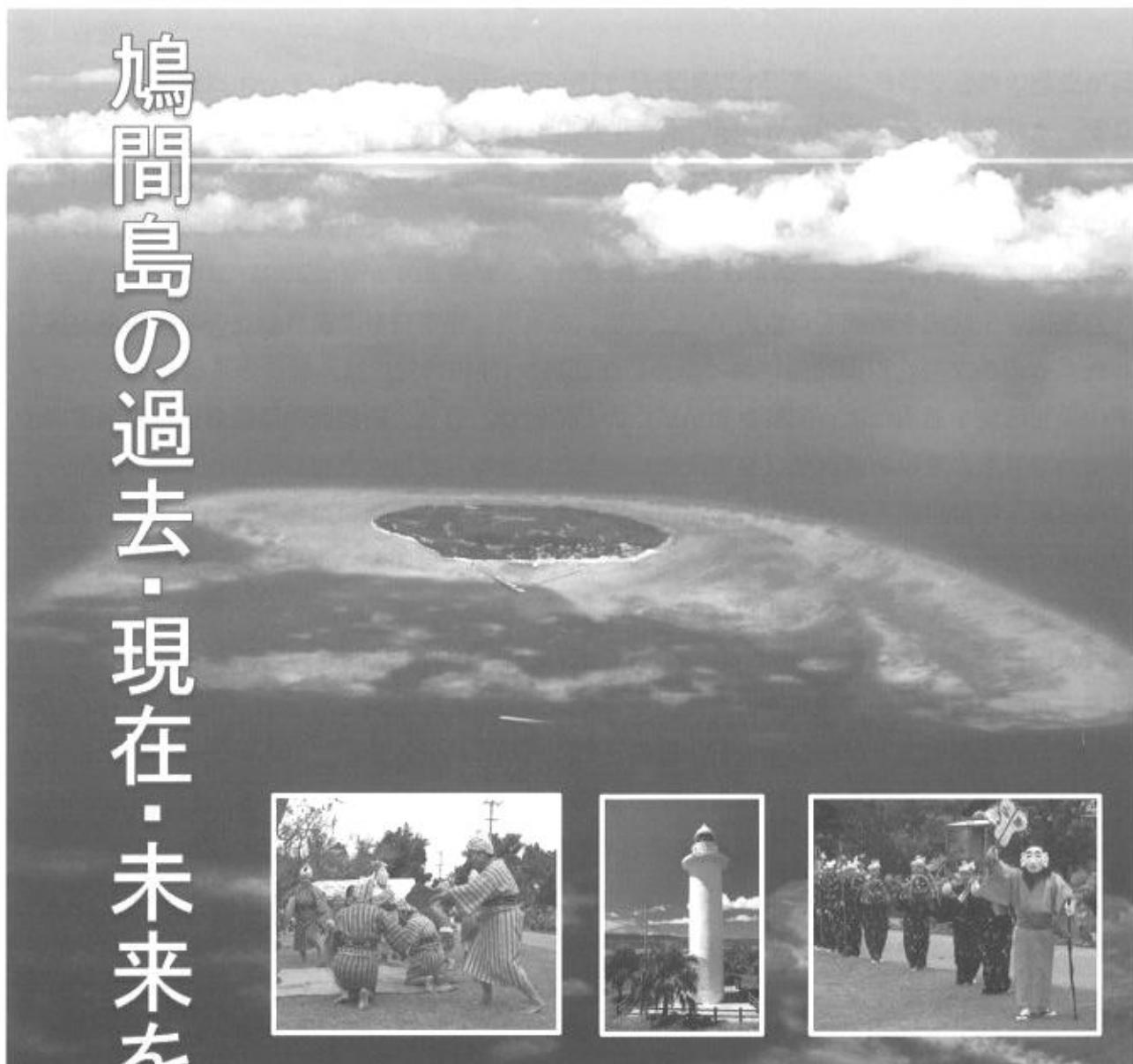
2014年7月12日の鳩間島豊年祭、2日目のトーピン（当日）に桟敷で演じられた棒術の写真である。笛や太鼓、ドラの音に合わせ「ホォーホォーヒヤーユイ」という掛け声とともに勇壮な演武が繰りひろげられた。

後方には2本の旗頭がみえる。左は2頭の獅子が飾られた西村の旗頭で旗文字は「瑞穂」、右は風車と矛があしらわれた東村の旗頭で旗文字は「祈豊」であった。

十数演目の舞踊が披露された後、前の浜で西村と東村対抗の爬龍船競漕が始まった。

その後、太鼓やドラに合わせて豊年祭の歌をうたい2日目の儀礼を終えた。

# 鳩間島の過去・現在・未来を語ろう!



## 竹富町史島じま編 シンポジウム 『竹富町史 第六巻 鳩間島』

日時:9月18日(日) 午後2時~午後5時

場所:石垣市商工会ホール 主催:竹富町教育委員会

### 第1部 基調講演

- ・大城肇 (琉球大学学長) 「鳩間島の過去と未来」
- ・得能壽美 (法政大学大学院講師) 「近世鳩間島の民衆生活と通耕」

### 第2部 パネルディスカッション

- ・ガイダンス 吉川安一 (名桜大学名誉教授)
- ・言語分野 加治工真市 (沖縄県立芸術大学名誉教授)
- ・自然分野 島袋憲一 (元竹富町教育委員会教育長)
- ・芸能分野 大城學 (琉球大学教授)
- ・コーディネーター 吉川英治 (元県立八重山高等学校校長)

## 近世鳩間島の民衆生活と通耕

—『竹富町史 第六巻 鳩間島』の知見を加えて—

得能壽美

はじめに

八重山の生活史を研究するうえで、「通耕」を重要なキーワードとされたのは浮田典良氏でした。その論文「八重山諸島における遠距離通耕」（浮田1974）は、戦前から復帰前までの八重山の生活史を通耕によって解明したのと同時に、近世史研究における島と「村」の関係、村高の意味、人頭税の賦課などを考える、新たな視点を与えてくれました。

筆者は、近世（前近代）における通耕の状況を、当時の文字史料から考えようとしたのですが、そのモデルケースとなったのが鳩間島で、人頭税廃止百年記念事業の新聞連載で発表し、のち論文にまとめました（得能2002・2003）。

『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』には、吉川安一氏の「鳩間島の古謡と人頭税制度」が掲載され、鳩間島から西表島への通耕の様子がいきいきと描かれています（吉川2003）。

筆者はこの研究を八重山全体、石西礁湖をめぐる島々の営みとしてひろげ、『近世八重山の民衆生活史—石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』としてまとめました（得能2007）。実は、鳩間島は石西礁湖ではなく、波照間島や石垣島東海岸も同様ですが、拡大解釈しました。与那国島は、遠く離れ独立していて、日常的にこのネットワークにはかかわっていませんでした（与那国島については、〔得能2013a-c〕参照）。

また、こういったネットワークは、農業だけでなく（農業にしても田のみだけでなく畑も含み）、水、材木、牧場などといった生活に密着した要求によって、民衆レベルで切り開き、継続してきたのです。それらをまとめて「通耕」といっています。

近代、つまり得能と浮田論文を繋ぐ部分については、最近の藤井紘司氏によるすぐれた研究があります（藤井2010・2014）。もちろん安渓遊地氏の西表島を中心とした一連の研究が、通耕の近現代的なありかたを詳細に記録していく重要であることはいうまでもありません。とくに鳩間島に関しては、〔安渓・盛口2010〕に、「鳩間島・海上を通う田仕事」（話者・花城良廣氏）を掲載しています。

八重山の島を「高い島」「低い島」と対比して考えられていますが、このような島の分類は、石垣島や西表島といった「高い島」における島内での遠距離通耕の姿を隠してしまうかもしれません。石垣島や西表島には、低い部分も高い部分も、開発が進んだ地域も遅れていた地域もあったので、島内での村域を超えた通耕が行なわれており、この村（域）の問題は近世史を考えるうえでたいへん重要なことです。また、八重山の近現代においては「低い島」と「低い島」とのネットワークもみられるようになりますし（糸数1990、古谷野2011）、おしなべて「低い島」の宮古内部では、近世に池間島の池間・前里両村が伊良部島に耕地や材木を求めており、

その伊良部島の佐和田・長浜・国仲各村は下地島で耕作しています（与世山親方宮古島規模帳・球陽）。

これらの研究によって、前近代から近代、1972年復帰までの八重山における通耕の歴史がほぼ明らかになり、通耕が八重山人の生活史にとって重要であることがわかつてきました。そこに鳩間島での通耕の新たな知見を示してくれたのが、『竹富町史 第六巻 鳩間島』です（以下、『竹富町史 鳩間島』）。小稿では、これまでの成果に同書での知見を加えて、近世鳩間島の生活を支えた通耕について、まとめてみました。なお、それも含めて、『竹富町史 鳩間島』全体の成果については〔得能2015〕参照。

### ①15世紀後半の八重山の通耕

八重山における通耕という生活様式が知られるのは、1477年に漂流して与那国島民に救助された、いわゆる朝鮮漂流民の記録（成宗康靖大王実録）です。そこにみえる当時の八重山の様子を先学の研究からまとめると、図1のようになります。

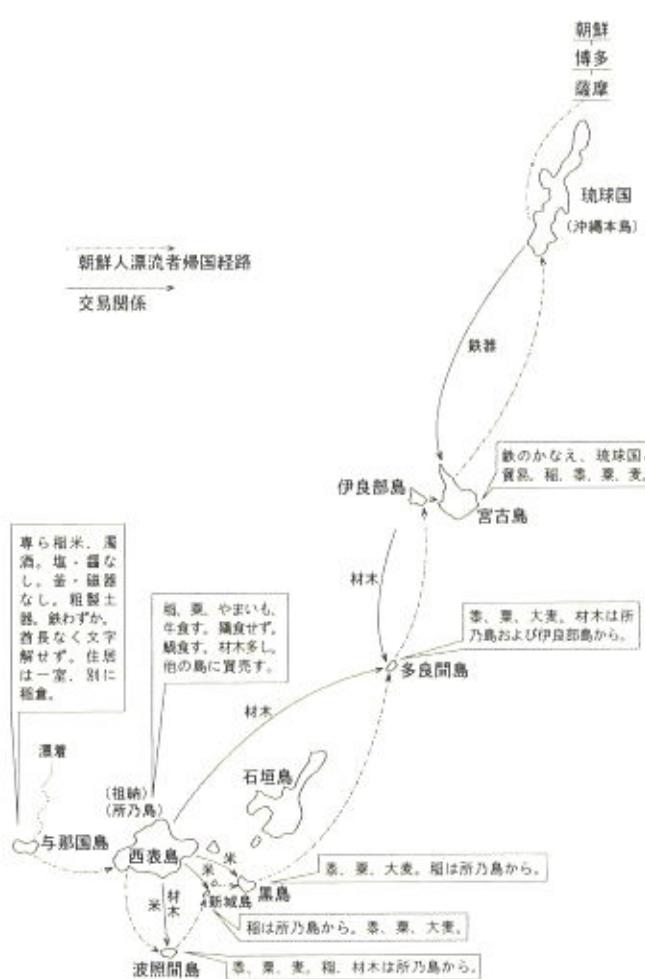


図1 1477年先島の通耕ネットワーク〔得能2007〕

いる八重山および宮古の様子は、1500年アカハチ事件の23年前のことであることにも注目できると思います。

その後、18世紀にいたるまで、八重山における通耕関係の史料はみられなくなります。これ

ここでの関心では、黒島・新城島・波照間島の島民が西表島へ出かけて、米や材木などを得ています。さらに、多良間島は西表島と伊良部島から材木を得ていて、八重山と宮古の結節点となっています。この図にはありませんが、宮古島は同時期に西表島に材木を求めていました（慶来慶田城由来記）。

この図では様子のわからない石垣島と竹富島・小浜島そして鳩間島が気になります。鳩間島が西表島から、黒島・新城・波照間と同様に、米や材木を得ていたと想像するのは簡単です。竹富・小浜も同様です。そして、石垣島が西表島と同じ役割をはたしていたとみることができ、鳩間をはじめとする小島嶼が、西表・石垣の両島と同様な関係をもっていたという想像も、正しいものだと思います。

さらに歴史的には、この地図が示して

は、史料が残っていないこともあります、通耕をめぐる状況に問題が生じなかったのではないかでしょうか。おそらく次の問題は、近世前期の島嶼部における人口増加と薩摩による仕明(開墾)の許可にあるとみられますが、その点については〔得能2007〕を参照してください。

## ②近世前期の鳩間「村」と通耕

1609年島津侵攻によって、琉球王国は近世という時代にまきこまれます。そういったなかで、八重山で17世紀末に問題になったのは、石垣島の宮良川河口での架橋についての議論にみられる「公務で他の村や島に通う」ことの困難さでした。1697年の八重山役人らの上申書によると、石垣島では蔵元に近い村々に夫遣いといって労働力の提供が課せられており、石垣・登野城や平得(註1)・大浜と同様に宮良・白保にまで命じられていましたが、宮良・白保の人々が毎日蔵元に通勤するのは困難だということです。このようなことでは、白保よりも蔵元に近い宮良村でさえ、そこで生活していくことのできる百姓はいなくなり、しだいに大浜・平得へ引っ越してしまうといっています。

そして、平得村も石垣村役人の管轄だったときは、朝夕石垣へ通わなくてはならないことから疲弊し、平得村に与人・目差をおいたといいます。このようなことは、石垣島の名蔵・崎枝・平久保、西表島の鹿川・網取や鳩間でも同様であって、とりわけ古見村役人の管轄下にあった鳩間島の住民はみな西表島に出かけてしまい、島に人がいなくなるという状態で、「ケ様之村ニ者誰とても住居申儀尽間敷与奉存候」(このような村には誰でも住みたいとは思わないと言じます)といっています(参遺状〔喜舎場永珣旧蔵史料〕2)。

その一方、鳩間島が古見村役人の管轄下にあった時代に、古見村から鳩間島に大城・東里・友利・通事・小濱・與那田の各家が移ったといわれます(屋嘉武雄氏の資料メモ『竹富町史鳩間島』111頁)。たいへん興味深いことで、マラリアから逃れたのかもしれません、小さい島に移ることによる食料確保の困難さがあったはずで(高宮2005)、やはり元島への通耕に頼らざるをえなかったのではないでしょうか。

1703年鳩間村から与人・目差の設置を求めた文書では、古見村役人の管轄下にあって、上納や公務のために古見村までの6里半を往来し、住民の負担になっているといいます。そして、そのような島の人と他の村の人が結婚することなく、古見村に夫や妻がいて、離ればなれになっている人もいました。こうして鳩間島の百姓は減少し、島は衰微していきましたが、黒島の保里村からの寄百姓で100人以上になったので、与人・目差を設置してほしいといっています。そうすれば、公務で島を出ることが少なくなります。

興味深いことに、これに続いて、鳩間島には200~300人が生活できるていどの耕地があるが、西表島の「鬱川古村」が海上半里ほどにあって、田畑が広く、当時すでに「往還二而田作」(往来して田作り)をしているので、今後、人口が500~600人増加しても(註2)、鳩間島での生活は可能だといっています(参遺状〔喜舎場永珣旧蔵史料〕2)。

こうして鳩間村は与人・目差が置かれ、いわゆる地頭持ちの村になりました。『竹富町史鳩間島』では、鳩間村が「独立村」になる過程を大城肇氏が整理されていますが、歴史的史料

よりも古謡「パトゥマムトウジラマ」や「バガパトゥマジラマ」に、この経緯がきちんと謡われています。歴史が記憶され語られるとはどういうことかを示しています(『竹富町史 鳩間島』111~113頁)。

後者では、鳩間島の人が古見村へ行く事情やルートを、頭らが巡視に訪れた際に、鳩間島から「ぱいばだん」に渡ってインダ浜に渡り、カキラ頂の道からインダの道から、由布の端の道から干潟の道から、着物の裾を腰半ば股半ばまであげて歩き、野底浜の道からカケラ越地の道から、古見村に渡ったと謡っています(喜舎場1970)。

鳩間島から渡る「ぱいばだん」は「鳩間中岡」では「ぱいばた」と謡われ、「南端」の意で、西表島北岸をいうのですが、これは鳩間島からみた命名であり、西表島北岸が島人の生活圏であったことを示しています(『竹富町史 鳩間島』7頁)。また、裾をからげて歩くというのは、橋のない河口部を徒渉する様子をリアルに表現しています。

1737年の八重山各村での生活のしやすさ調査があります。竹富町の村々をみると、

#### 竹富村 (波座真・仲筋) と黒島村 (黒島・東筋・保里)

風気は良いが、石の多い平地で畠地は狭い。人口は多く家の材木も石垣島や西表島の古見(西表西部)や西表(西表東部)など船で3~4里のところから伐採するので、「難住居所」

#### 小浜村 風気は良く、田畠も広く「住居安所」

新城村 風気は良いが、土地は石の多い平地で畠地は狭い。それで海路1里余の所へ往還して耕作するので、「難住居所」

#### 古見村 (三離・大枝・平西・与那良) と仲間村・高那村・南風見村

風気は悪いが土地は良く、田畠も広い。山も近く材木も入手しやすく、「住居安所」

#### 西表村 (祖納・干立・浦内・多柄・上原) と慶田城村 (祖納・成屋・船浮・網取・鹿川)

風気は悪いが、田畠は広く山も近く材木も入手しやすく、「住居安所」

#### 鳩間村 土地は狭いが風気は良い。海路1里余の所へ往還して手広く耕作するので、「住居安所」

#### 波照間村 (波照間・平田・宇保川)

風気は良く、土地も相応にあるが、石垣島への18里の海路は難海で思うように往還しにくい。そのうえ海路12里余離れた西表島から材木を取るので、「難住居所」とあります(参遣状抜書下)。島を「村」とするのは、当時は島を行政的に村としたからです(西表島や石垣島はいくつかの村からなっています)。

この調査では、石垣島北部や西表島の村々において、おそろしいことに風気(マラリア)は住みにくいことの条件になってしまい。それよりも山林の有無や、通耕で海を渡ることが、住みやすさの評価を左右しているようです。

鳩間島は、海路1里余、つまり西表島に行き来して耕作をしているのですが、おそらくその距離が短いことと耕地面積の広さによって、住みやすい所だと評価を受けているようです。

ただほぼ同じ条件の新城村は反対の評価を受けていますし、そもそもこの評価は調査した当時の役人のものであり、島民の気持ちとは乖離している部分があるでしょう。

耕作のための通耕が記されない村では、竹富は調査16年後の1753年石垣島富崎への通耕（参遺状抜書下）、黒島は調査より前の1731年に石垣島での畑作（参遺状抜書上）、小浜は調査前の1732年に西表島ヨチンでの畑作が確認できます（同前）（註3）。

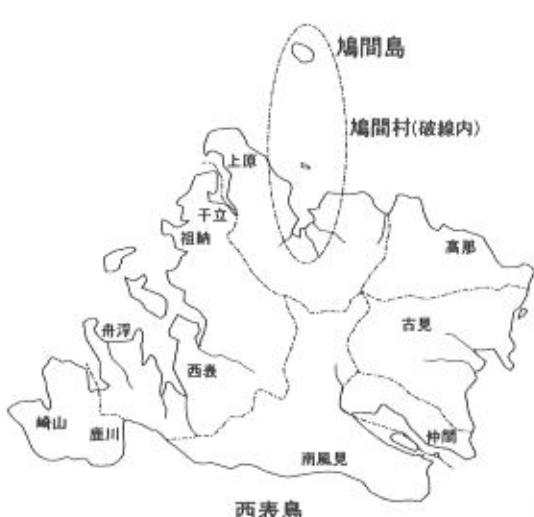
住みやすさ調査と同じ1737年鳩間目差に就任した黒島仁屋への褒美状では、鳩間島は与人・目差の指導によって田の開発が進んだといわれますが、田の所在地は記されていません。また、「用水不自由有之、船路壹里余差越汲來候付、村近ニ井堀させ」（用水が不自由であったので、船路一里余に出かけて汲んできていたのだが、村の近くに井戸を掘らせた）とあり（得能2007参考史料4）、鳩間島は水も西表島に求めていたことがわかりますが、同様のことは竹富島・黒島・新城島でもいわれ、新城島では「旱ばつになると、島の人びとはサバニで西表島に渡り、仲間川河口のアーミケ（天の川）の湧水を、一斗缶や水甕に入れて運び、飲料水を確保した」といわれます（『竹富町史 新城島』35頁）。なお、このとき鳩間島にできた井戸は、インヌカ（西の井戸）と称され、黒島仁屋の末裔である仲本家の人々が西村井戸の祈願を担当していました（加治工2011、『竹富町史 鳩間島』53頁）。

1739年大御支配と称される検地において、西表島の西表・慶田城両村に定められた上納田地を、両村と鳩間村の頭数（すかず=人頭税対象者）に地割しています（慶来慶田城由来記）。1741年には西表島の山林の検地が行なわれ、鳩間村も管理・利用する山林（榎山）が西表島に

設定されました（八重山島年來記）。ここにおいて、鳩間村は西表島に耕地と山林を公的に有するようになります、それらを含んだ行政的な鳩間「村」が成立したことになります。鳩間村の範囲を示す概念図は下記のようになります。鳩間村には水田も山林もあったのです。

鳩間村の上納田地を知る史料に年未詳の「上納田地配分に関する書類」があり、前半に水損田・荒田、与人・目差のオエカ田の書き上げ、後半にこれらを差し引いた上中下の田9町8反余（2万9579坪余）を15歳から50歳までの鳩間村民の男女73人に地割した結果が記されています。田の所在地は分散し、面積は年齢・性別に関係なく平等に405坪が配分されています。

図2 鳩間「村」図



その田地の名称に、潮田はさま・大田良・仲田・ちへほうき・にし田・外小浦・ふめやはさま・ひなお（ちカ）ら田原・東崎田原・とほた田原・こてな田原・なかなたら・仲宗良・東とまた・内小浦・中石田原・よせきいら・外なたら・崎田などがあります。

これらの地名は田原を単位とするごく小さな地名とみられ、『竹富町史 鳩間島』の重要な成果の一つである「島人の生活圏における地名 2. 西表島北部地域」の地図におとされた地

名と対照して、所在地と田を所有した家をまとめると、

仲 田→ナカダ (67頁) 船浦川上流、加治工・島袋・友利・吉川の各家など。

に し 田→ニシダガーラ (68頁) ティドゥク岳から船浦湾へ流入する川。

外小浦・内小浦→クーラ (63頁) 通事・小浜・西原・仲本・兼久・浦崎・松竹・寄合・仲底・鳩間・上里・与那田の各家など。

東とまた→トウマダ (66頁) インダ台地崖の東側低地。松竹・加治工・西原の各家。

よせきいら→ユシキダー(70頁)ヨシキダ川北側低地。大城・加治工・米盛・石嶺・宮良・小浜・兼久・小底の各家。

外なたら→ナダラ (68頁) 船浦湾に流入するナダラ川一帯。

崎田・東崎田原→サキンダ (65頁) ガバナレー沿岸一帯。西原・兼久の各家。かつて鳩間のサキンダヌ・マキがあり、小底・西原・兼久の各家を中心にインダ牧から分離した。

となって、通耕の実態が伝わってきます。これらの地名は、上納田地として地割された田のある地名で、「仲田」「小浦」「とまた」「よせきいら」「崎田」は、後述する明治前期の「八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」に、「鳩間島の人々が西表島北岸で水田を通耕する際に拠点とした所」(『竹富町史 鳩間島』59頁)といわれるインダ村の周辺地名として掲げられています。

以上、上納田地のすべてを確認できたわけではないのですが、これは公的に地割された田なので、「鳩間中岡」が伝えるように上原や船浦の人に不満はあっても、おおっぴらには言えなかつたかもしれません。このようないわば「公田」に対して、個人的な開墾による仕明田という「私田」は、売買も自由であり私有財産として認められていました。

1701年八重山では諸士・百姓にいたるまで仕明田を有する状況になっていましたが、ルールがなく不正も行なわれていて、争いごとが絶えなかったといわれています(参遺状〔喜舎場永珣旧蔵史料〕2)。上記では文書を調べるようにいわれていますが、その3年後1704年の例では、新城村が古見村の南1里半にある大浦やすらという地の田畠に通耕したいと訴えたところ、王府は八重山在番に対して「古見村百姓被致掛引領掌之上」(古見村百姓と相談して了承のうえ)で認めると、通耕先の村のことを斟酌しています(参遺状)。

八重山では同村内においては開墾地で2~3年間耕作されていない土地は、誰が耕作しても構わないという慣習があったといわれます。ただし、他村の人には「一切開墾ヲ許サス…他村人ノ開墾セントスルモノハ村民ノ承諾ヲ経若干ノ叶米ヲ村ニ納メテ土地ヲ借受ケルヲ要ス」「他村人民開墾ヲ為サントスルトキハ村吏員及総代即チ世持ニ協議シ其承諾ヲ得ルヲ要ス若総代限決定シ難キトキハ村民一同ト協議シ諾否ヲ決スルモノトス」と、明治期の旧慣調査でいわれています(一本書記官取調書)。

そもそも他村(しかも他島)の土地を勝手に耕すとは考えにくく、このような規制によって調整されていたのでしょうか、近隣の村人の耳目をひきつけるほど上等な田を作ったからといって、恨まれる筋合いではありません。実はこのあたりのことが、近世の「村」とは何だっ

たのだろうか、を考えるきっかけになりました。

花城良廣氏は、鳩間の人の田が上等になった理由について、「西表の人は、そこに住んでいますから、いつでも田仕事ができる。しかし、うちの島は、海を渡って、田小屋に住んで田仕事をやらないといけない……。時間が限られていますから、日が落ちても、必死に働いて、集中して仕事をしたせいじゃないかと思いますね」とおっしゃっていて（安渢・盛口2010）、これが納得のいく説明ではないでしょうか。

うらやまれる田は、『竹富町史 鳩間島』「鳩間島の田地の分布」図にみえます（484頁）。吉川安一氏は「鳩間島の人々が稻作をしていた西表島の田地は、私が聞き覚えた中でも伊武田（いんだ）、シザバナレ、マーレ、船浦（ふのーら）、ピナイ、高那、赤離（あかばなれ）、ウボーダ、上原（ういばる）、浦内、宇多良等を挙げることができます」といい（吉川2003）、花城良廣氏の家は大見謝川近辺のケーダ川沿いに田があったそうです（安渢・盛口2010）。

このようにみていくと、先の鳩間「村」図の西表島部分は、「私田」を含むことによって拡大、あるいは縮小、地域の変化などが起こっていったはずです。

話は戻って、1741年鳩間村が図のようになった12年後の1753年には、人口は450人と増加し、「地方狭キ故、西表地方之内海上罷渡、仮屋構ニ而作毛仕候」（土地が狭いので、西表地方へ海上を渡って、仮小屋を構えて農業をしている）として、通耕先の農耕を監視するための耕作当という役職の増員を八重山の役人が願っています（参遣状抜書下）。なお、このときは、八重山各村で増員を願っていて、八重山全体の通耕状況を伝えています（参遣状抜書下）。

1770年には、「竹富・新城・鳩間三ヶ村、富崎・佐久田・南風端江作場見廻之儀、不断百姓等作場往通便舟ぢ可相済事」といわれ、竹富→石垣島富崎、新城→西表島佐久田、鳩間→西表島北岸への通耕が行なわれています（八重山島諸村所役公事帳）。

### ③近世後期の鳩間「村」と通耕

1771年八重山は明和津波と称される大災害にみまわれます。鳩間の被害は、「鳩間村構之作地いんた・水浜両所磯辺所々引損置申候」とあって（大波之時各村之形行書）、津波被害があつた鳩間村が管轄している耕作地として「いんた」、「水浜」を掲げています。「いんた」は前掲の西表島で通耕の拠点となった「インダ」、「水浜」は「永浜」の誤記といわれ、鳩間でいうナーバマ（長浜）で、インダの浜の一つです（『竹富町史 鳩間島』59頁）。

この津波以後、八重山全体で通耕は安定的な営みとして推移したとみられ、史料にはみえなくなります。そもそも通耕は、行政が指導することではなく、訴訟や事故などの問題がなければ、文書に記録されることはないのです。

19世紀後半には事故の記録として現われます。1869年1月5日、鳩間の百姓が「いんた」に出かけ、「ゑ組を以稻植付」とあり、「ゑ組」はユイ組のことです。その組の「与(二組)頭宮古やまつ」が所持する田が上原村の川田にあり、5人がそこで田植えに出かけることになりました。ところが、そのうちの2人が長期間にわたって家を開いていて、いったん鳩間に帰り、翌朝「いんた田元」に渡りたいというので、最終的には3人が鳩間に帰ることになり、剝

舟で出かけましたが、彼らは遭難しています（未年怪我帳）。「宮古や」の屋号は、鳩間島第5班に「メーカー（宮古家（ミルクンヤー、大城家））」があります（『竹富町史 鳩間島』253・255頁）。

近代の記録は調査資料として残される場合があり、1885年八重山を訪れた田代安定の記録では、鳩間島民の耕地は、田20町6反4畝余、畑18町2反5畝余で、田は鳩間島にはないので、同資料に地名がみえるインダ村に所在したとみられます。そのほか鳩間の牧場はインダ牧に、山林は友利山にありました（八重山島管内宮良間切鳩間島巡査統計誌）。

19世紀後半になれば新聞記事にもみられますが、笹森儀助『南島探検』にまとめてることができます（笹森1982）。

鳩間島・黒島・竹富島・新城島ノ四島ハ、西表島二、飛地耕耘セシム。近クハ二海里、遠クハ八、九海里以上ヲ隔テ、剣舟ニ乗り黒潮ヲ涉リ、求テ有病地ニ入ラシム…石垣・西表島ノ中ニモ水田ナキ村民、水田ヲ三、四里外ニ耕シニ行ヲ数々実見セリ

笹森は通耕を人頭税の米納によるものとして人道的に非難していますが、15世紀、18世紀、19世紀を通じて確認できる八重山の通耕は、民衆生活を支えてきたものでした。さらに通耕は、沖縄県の土地整理を経て、20世紀にいたっても行なわれており、人頭税のあるなしにかかわらず連続した八重山のライフスタイルであり、もちろん通耕先や動機は時代によって異なりますが、崎山直氏が八重山の歴史や文化を考えるうえでのキーワードとした「島々と海の総体」（崎山1979）を具体的に確認することを可能にしています。

以上のように、『竹富町史 鳩間島』の知見を追加することで、通耕による生活がリアルに厚みをもって再現できるようになりました。しかしながら、歴史的には八重山関係史料の伝存は十分ではなく、竹富島・新城島や黒島などでわかる通耕の状況も合わせて、全体像がみえてきます。竹富島・新城島はすでに『竹富町史』で刊行されていますし、黒島は2019年の刊行が予定されているようです。これらを揃えて、さらに検討を加えていこうと、竹富町史の編集事業に期待しているところです。

## 註

- 1 この当時は、まだ、石垣村から新川村が、登野城村から大川村が、平得村から真栄里村が分立していなかった。
- 2 通耕により鳩間島に居住可能な人口は「人数五六百人相重候而も」と書かれており（参遺状〔喜舎場永珣旧蔵史料〕2）、「500～600人（が）増えても」と読みたい。通耕なしで想定できる200～300人に加えるのではなく、現状(100人)に500～600人増として600～700人となるか。歴史上確認できる鳩間島の最大人口は1945、1949年の654人で、前近代では津波前1761年の513人である（『竹富町史 鳩間島』34～45頁）。
- 3 波照間島での田畠の耕作については、〔安溪・盛口2010〕所収の「波照間島・天水田と畠」（著者・島村修氏）を参照。

## 【史料出典】

- 一木書記官取調書…琉球政府『沖縄県史14 雜纂1』1965  
大波之時各村形行書…石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書12』石垣市1998  
球陽…球陽研究会『球陽』角川書店1974  
慶来慶田城由来記…石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書1』石垣市役所1991  
参遣状…喜舎場永珣旧蔵史料（石垣市立八重山博物館）  
参遣状 [喜舎場永珣旧蔵史料] 2 …石垣市教育委員会市史編集課『石垣市史叢書22』石垣市教育委員会2016  
参遣状抜書下…石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書9』（参遣状抜書下巻）石垣市1995  
参遣状抜書上…石垣市総務部市史編集室『石垣市史叢書8』（参遣状抜書上巻）石垣市1995  
上納田地配分に関する書類…琉球大学附属図書館宮良殿内文庫No.72

<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/s/viewer?&cd=00010720>

- 成宗康靖大王実録…池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編・訳注『朝鮮王朝実録琉球史料集成』  
榕樹書林2005  
未年怪我帳…里井洋一「『未年怪我帳』—その翻訳と二・三の考察—」『琉球大学教育学部紀要』36-1 1990

[http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp:8080/bitstream/123456789/319/1/satoi\\_y15.pdf](http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp:8080/bitstream/123456789/319/1/satoi_y15.pdf)

- 八重山島管内宮良間切鳩間島巡検統計誌…史料館（国文学研究資料館）  
八重山島諸村所役公事帳…沖縄県立図書館史料編集室『沖縄県史料 前近代7 首里王府仕置3』1991  
八重山島年来記…石垣市総務部市史編集課『石垣市史叢書13』石垣市1999  
与世山親方宮古島規模帳…平良市史編さん委員会『平良市史 第三巻資料編1 前近代』平良市役所1981

## 【参考文献】

- 安溪遊地・盛口満（編）  
2010 「田んぼの恵み 八重山のくらし／聞き書き・島の生活誌③」ボーダーインク
- 糸数兼治 1990 「小浜島の道」沖縄県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書VII—八重山諸島の道』沖縄県教育委員会
- 浮田典良 1974 「八重山諸島における遠距離通耕」『地理学評論』47-8  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/grj1925/47/8/47\\_8\\_511/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/grj1925/47/8/47_8_511/_pdf)
- 加治工真市2011 「鳩間島プール（豊年祭）の構造的意味」『竹富町史だより』32  
[http://www.town.taketomi.lg.jp/uploads/fckeditor/uid000013\\_20160425133221dc4bca94.pdf](http://www.town.taketomi.lg.jp/uploads/fckeditor/uid000013_20160425133221dc4bca94.pdf)
- 喜舎場永珣1970 『八重山古謡』沖縄タイムス社

- 古谷野洋子2011 「八重山のカツオ漁を巡る生業ネットワークー波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを中心にしてー」 法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』37
- 崎山 直 1979 「〈八重山の歴史と文化〉島々と海の総体—『ヤイマネシア』の視点ー」『八重山の歴史と文化』(2000) 所収
- 笹森儀助 1982 『南島探験』東喜望校注 平凡社(東洋文庫)
- 高宮広土 2005 『島の先史学—バラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代—』ポーダーインク
- 得能壽美 2002 「通耕と人頭税—島と村—」『八重山毎日新聞』2002/09/20・21→『人頭税廃止百年記念誌あさばな』(南山舎2003) 収録
- 2003 「近世八重山における通耕と『村』—鳩間島をモデルに—」『沖縄文化』95
- 2007 「近世八重山の民衆生活史—石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク—」榕樹書林
- 2013 a 「人頭税と与那国島」与那国町史編纂委員会事務局『町史(本巻) 第三巻 歴史編黒潮の衝撃波 西の国境 どうなんの足跡』与那国町役場
- 2013 b 「近世与那国の民衆生活史」同上
- 2013 c 「与那国島をめぐる漂流・漂着」同上
- 2015 「『竹富町史 第六巻 鳩間島』の編集・発刊によせて—鳩間世ぬ直らば・友利世ぬ稔らば—」『八重山日報』2015/04/27・29→『竹富町史だより』37(2016) 収録
- 藤井祐司 2010 「近代八重山諸島における遠距離通耕の歴史的展開—1890~1970年代における西表島東北部を事例として—」日本地理学会『地理学評論』83-10  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/grj/83/1/83\\_1\\_1/\\_article/references/-char/ja/](https://www.jstage.jst.go.jp/article/grj/83/1/83_1_1/_article/references/-char/ja/)
- 2014 「琉球弧・八重山諸島における通耕実践と生態資源利用—19世紀末期から20世紀初頭における『高い島』と『低い島』との往来をめぐる事例—」『国立民族学博物館研究報告』38-2
- 吉川安一 2003 「鳩間島の古謡と人頭税制度」『八重山毎日新聞』2003/04/12~14→『人頭税廃止百年記念誌あさばな』(南山舎2003) 収録

# 昭和40年代 島間島の祭祀

—宮良高弘寄贈資料より—

大城 學

竹富町教育委員会は、平成21年に民俗学者・宮良高弘氏より寄贈された資料群「宮良高弘寄贈資料」を収蔵している。ここから島間島に関する写真をピックアップして紹介することにする。そのとき便宜的に番号、タイトルを付し、知りうる情報を施した。

1、結願祭の受付係



(於：友利御嶽)

(腰かけている者) 浦崎行雄

(受付をする者) 手前から大城キク、大城 博、

島間昭一。

3、結願祭の弥勒



2、結願祭 ティジリビーの三十三挙



(於：友利御嶽の境内)

手前から米盛富太郎、加治工伊佐、

小浜真吉。

4、弥勒と弥勒の子



弥勒の子：友利ヨシ、大城キク、仲宗根結十子。

## 5、結願祭の舞踊「鳩間中岡」



## 6、結願祭の座開き



バイデンのサカサ 右から加治工千代、  
加治工敏子、吉川信子。

踊り手：友利ヨシ

客席（1列目左から）西原章吉、慶田盛正光

（校長）、大工定市、小浜真吉（ティジリ  
ビ一），

客席（2列目左から）仲宗根結十子、大工 良  
鳩間良子、西原クヤマら。

## 7、豊年祭 ティジリビーの三十三拝



手前から米盛富太郎、加治工伊佐、  
小浜真吉。

## 8、豊年祭のカムラーマ



## 9、豊年祭のカムラーマ



翁は鳩間昭一、後方に加治工 実、富里善一、米  
盛 勝、鳩間真吉。

10. 友利御嶽での祈願



サカサは左から加治工敏子、加治工千代、吉川信子。ティジリビーは左から米盛富太郎、加治工伊佐、小浜真吉。バギツカサは加治工シゲ。

11. 豊年祭の弥勒

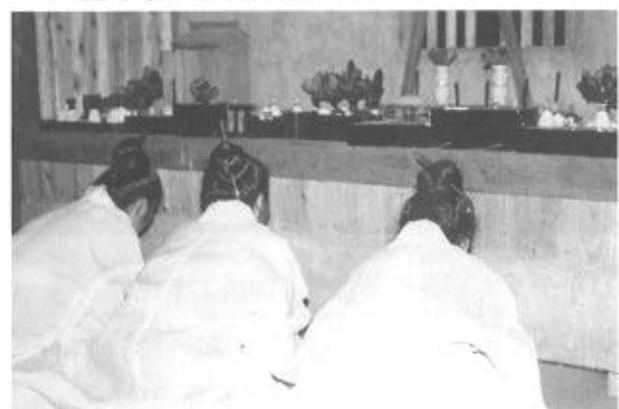


12. 豊年祭の弥勒



前列より山城ヒロ子、大工 良。後方：大城 博

13. 豊年祭 友利御嶽のウブヤー



15. インヌカー（西の井戸）

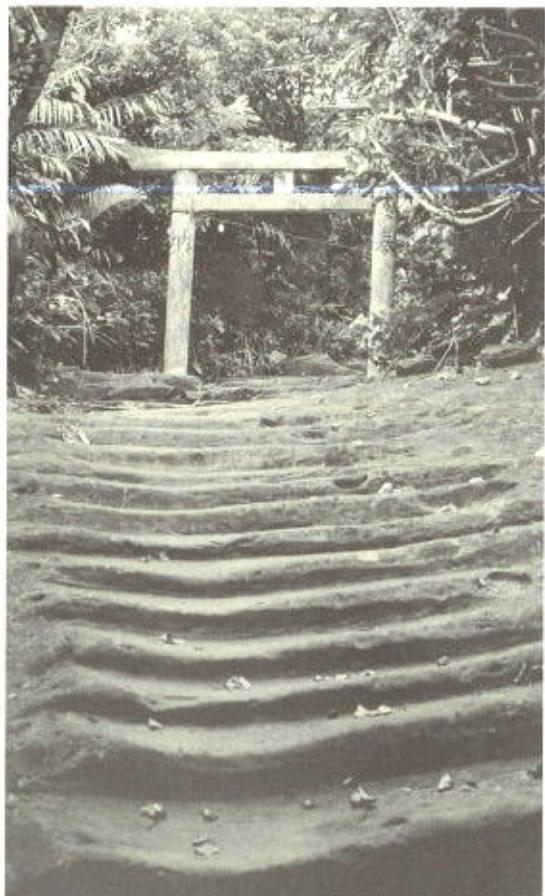


14. 豊年祭 友利御嶽のウブヤー

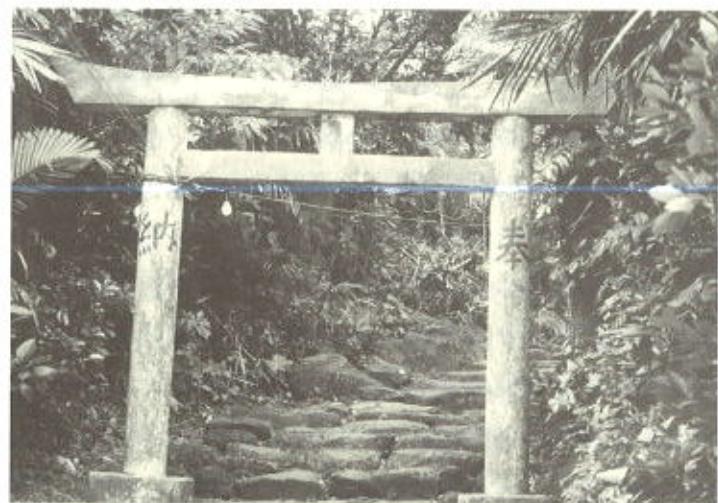


サカサは左から加治工イカ、加治工千代、吉川ノブ。

16. 友利御嶽の鳥居



17. 友利御嶽の鳥居



19. 髭川御嶽の鳥居と拝殿



20. 髭川御嶽の拝殿



# 鳩間島に関する資料

本稿は『竹富町史 第六巻 鳩間島』(以下、『町史 鳩間島』)の編集で用いた資料を中心に、業務のなかで得られた資料を加えて作成した、鳩間島に関する資料の一覧である。そのとき、『竹富町関係文献目録』(竹富町、1990年)、『八重山民俗関係文献目録』(石垣市、1995年)を参考とするほか、沖縄県立図書館、石垣市立図書館の蔵書検索システムを活用した。

また本稿では、鳩間島のみを対象とした書籍だけでなく、鳩間島に関するまとまった内容、記述という観点で、論文集や報告書、エッセイ集などのなかからも積極的に拾って収載した。

ところで、三木 健氏は著書『八重山を読む—島々の本の事典—』(南山舎、2000年)で、八重山に関する出版物を島嶼別に分類・分析している。多い順から示すと、①石垣島、②八重山一般、③西表島、④与那国島、⑤竹富島、⑥波照間島、⑦鳩間島、⑧小浜島、⑨黒島、⑩新城島となっている。このデータによると、鳩間島は八重山関係書全体のなかで、わずか1.2%の割合でしかないが、本稿を作成するにあたって、改めて多くの資料があることが分かった。

ここではその特色を三つにしぼって記すことにする。

## 1. 島人、郷友の成果

これらを大雑把に見渡したとき、鳩間島の住民、郷友自らが『鳩間島振興開発の課題』(鳩間島研究サークル、1979年)、『鳩間島誌 沖縄在鳩間郷友会十五周年記念誌』(沖縄在鳩間郷友会、1983年)、『鳩間小学校創立百周年記念誌 波濤を越えて』(竹富町立鳩間小学校、1997年)などの大きな成果をあげていることが分かる。

どれも島人・郷友ひとりひとりの顔が浮かび上がるときに同時に、鳩間島出身の研究者による科学的な視点が盛り込まれており、鳩間島を総合的・歴

史的に理解できるような配慮がなされている。

各分野の執筆者は、各自の専門的な立場と、島人ならではの視点による具体的な記述を心掛けているように見受けられる。また、後掲する資料の一覧をみると、自らの課題を長い年月をかけて追求していることが分かる。このことは島人の研究・創造の源泉が島にあることを物語っている。

『町史 鳩間島』もこれらの積み重ねのうえに成り立ったものであろう。

また、田代 浩『蒲葵の下で』(1994年)、小濱光次郎『鳩間島追想』(1996年)などの自分史刊行も貴重な歴史の証言として見逃せないものである。

もう一つ紹介したい資料がある。1977年(昭和52)の鳩間青年会再結成にともなって発刊された『はとま』(鳩間青年会)である。これは1980年前後の状況をよく伝えており、今となっては歴史資料としての価値も見いだすことができる。当時、多くの関係者から逐次刊行物として楽しみにされていたというだけでなく、島の内側からの視点に貫かれた資料としても貴重である(第4章「第2節 社会教育」『町史鳩間島』参照)。

## 2. 鳩間島の歌謡に関する資料

有名な歌謡『鳩間早節』は鳩間島の『鳩間中岡』に由来し、『鳩間節』として人口に膾炙している。それだけに『鳩間節』は、芸能に関する多くの文献に紹介されている。本稿は手元にある代表的な文献を中心に収載したにすぎない。

また、鳩間島には『鳩間節』のみならず、豊かな歌謡が伝承され、豊年祭は「歌に始まり、歌に終わる」といわれるほどである。

『町史 鳩間島』でとりあげた伝統的な歌謡は56曲あるが、これらがどの歌集に収録されているのかを「収録歌謡校異表」(368-369頁)に示し、典拠を明らかにしている。鳩間島の歌謡の理解に役立てていただきたい。

### 3. 「子乞いの島」から「瑠璃の島」へ

森口 駿『子乞い—八重山鳩間島生活誌一』(1985年、マルジュ社)は、近年における鳩間島への眼差しを方向づけたドキュメントとして大きな影響があった。本書は、本土復帰後10年目の1982年(同57)、過疎化による小中学校の廃校をめぐり、島外に児童を乞い、学校を存続させようという、島の実状を克明に描いた作品である。

本書はさらに2000年(平成12)に増補・新装し、『子乞い—沖縄孤島の歳月—』(凱風社)として版を重ねているだけでなく、漫画家・尾瀬あきらの作品「光の島」の原作としても知られる。「光の島」は2001年(同13)から2003年(同15)に小学館の『ピッグコミック オリジナル』に連載された(後、単行本『光の島』全8巻)。その後も『子乞い』は、2005年(同17)にはテレビドラマ化され(「瑠璃の島」)、2008年(同20)には舞台化され(「月の真昼間」(劇団文化座))、ジャンルを越えて展開している。

「瑠璃の島」以降、「鳩間島音楽祭」の動員数や観光客が激増していることも注目できる。その背景には、「瑠璃の島」によって、鳩間島の知名度が一挙に増加したことが考えられる。しかし「瑠璃の島」は、孤島苦にあえぐ実状よりも、何もない癒しの島としての側面が強調され、『子乞い』との落差も指摘されている(200509参照)。

その後、鳩間島の島づくりや学校存続を真正面からとりあげた、学術的な研究論文もいくつか現れてきた。そこでは「子乞いの島」と「瑠璃の島」は、シンボルとして対照的に語られる傾向をよみとることができる。

これらの資料が島づくりに直ちに活かされることはありえないだろう。しかし、島が主体的に歩んでいく方法を探求しようとするとき、島の未来を展望しようとするとき、先人の残してくれた資料から学び検証する態度は忘れないでいたいものである。

#### 凡例

- ・原則として発行年月順に並べた。
- ・書誌情報として、なるべく発行年、執筆者、表題、発行所、冒頭の頁数を記すように努めた。しかし、現物にあたることのできなかった資料もあり、情報の欠落したものもあることを予め断つておく。
- ・発行年については、年月のレベルまで記すことにした。その際、数字6桁で表わすことにした。また、月レベルが不明の箇所は00とした。

例えば、1967年8月→196708、2013年12月→201312、2016年?月→201600

- 188500 田代安定編「八重山管内宮良間切鳩間島巡査統計誌」→200909参照  
191500 比嘉重徳「鳩間島・鳩間ふし」(『八重山の研究』(大城活版社))  
192211 佐藤惣之助「鳩間ふし」(『琉球諸島風物詩集』)→198802参照  
192411 神田精輝「鳩間島海底の噴火に就て」(『八重山新報』1924年11月11日付)  
192412 神田精輝「鳩間島海底の噴火に就て」(『八重山新報』1924年12月1日付)  
192611 宮良當壯「鳩間島記事」(『民族』(第2巻第1号))→198100  
192701 宮良當壯「鳩間島記事」(『八重山新報』1927年1月21日付)→199703参照  
192908 観血學人「鳩間紀行」(『八重山新報』1929年8月15日付)  
192909 観血學人「鳩間紀行」(『八重山新報』1929年9月5日付)  
193201 大工恵理「鳩間漁業組合漁福丸台湾出魚視察記」(『八重山民報』1932年1月21日付)  
193204 「鰯漁船の制限決議—鳩間漁業組合が—」(『先島朝日新聞』1932年4月8日付)

- 193408 宮良當壯「鳩間島記事」『南島叢考』(一誠社) 235頁
- 194800 山城善三・山城久子「鳩間島灯台」(『沖縄事始め物語』)
- 195003 東恩納寛惇「鳩間島」『南島風土記』(沖縄郷土文化研究会、南島文化資料研究室) 449頁
- 195200 「<民謡集>第1編舞踊を主とした民謡—鳩間節—」(『おきなわ』(No.24)) 12頁
- 195900 高宮広衛、C.W.ミーヤン「八重山鳩間島中森貝塚発掘概報」(『文化財要覧』(1959年度版) 琉球政府文化財保護委員会) 56頁
- 196106 加治工真市「鳩間方言の音韻体系について」(『琉球方言』(第3号) 琉球大学方言研究クラブ) 3頁
- 196203 本田安次「鳩間島」『南島採訪記』(明善堂書店) 306頁
- 196406 多田 功・宮原道明「八重山群島与那国島・西表島・鳩間島におけるフィラリア調査」(『九州大学海外学術調査委員会学術報告 第2号 八重山群島学術調査報告』九州大学)
- 196406 宮原道明・多田 功「八重山群島西表島・鳩間島における腸管寄生虫類の調査」(『九州大学海外学術調査委員会学術報告 第2号 八重山群島学術調査報告』九州大学)
- 196406 小谷信夫・松本征夫・多田 功・宮武頼夫・宮原道明「八重山群島、特に西表島及び鳩間島の概観」(『九州大学海外学術調査委員会学術報告 第2号 八重山群島学術調査報告』九州大学) 31頁
- 196406 「鳩間島の地形および産業」(『九州大学海外学術調査委員会学術報告 第2号 八重山群島学術調査報告』九州大学)
- 196502 新川 明「新南島風土記」(『沖縄タイムス』1965年2月21日付)
- 196700 「竹富町の文法—竹富・西表祖納・黒島・波照間・小浜・鳩間—」(『琉球先島方言の統合的研究』明治書院)
- 196807 牧野 清「鳩間島の状況」『明和の大津波』(私家本) 169頁
- 196800 加治工真市「鳩間島古謡の一つ・新室寿歌『アーバーレー』について」(『沖縄文化』(第6巻 第3・4号) 沖縄文化協会) 5頁
- 196901 鳩間諒子「鳩間島の古謡」(『八重山文化』(No.2))
- 197002 「第5現象<5>八重山の零細漁民石垣島沖のチナカキヤ(追い込み漁) 鳩間島のツノマタ漁、ほか」(『朝日ジャーナル』1970年2月1日号)
- 197105 山城善三「鳩間島灯台」『沖縄事始め物語』(旭広研) 327頁
- 197200 戸川史子「八重山鳩間島報告抄—信仰伝承を中心としてみた鳩間島—」(『南島研究誌 世』(第2号) 沖縄文化研究会)
- 197302 本田安次「<八重山の信仰と芸能>鳩間島の歌謡」(『離島・雑纂』木耳社) 94頁
- 197300 「第14図小浜島および鳩間島地下水調査地点位置図」(通商産業省工業技術院地質調査所『沖縄水資源開発調査報告・八重山地方』)
- 197300 「第6図小浜島および鳩間島地質概略図」(『沖縄水資源開発調査報告・八重山地方』)
- 197300 加治工真市採集「鳩間島の昔話」『沖縄県八重山鳩間島方言』(方言録音シリーズ15) (国立国語研究所)
- 197400 阿部 学「鳩間島」(『特定鳥類等調査』)
- 197503 沖縄県土木部、国際航業株式会社地質部『鳩間島地下水試掘調査報告書』
- 197504 片山一道「八重山鳩間島の増殖構造とその集団遺伝学的解析」(『人類学雑誌』(第83巻第4号) 日本人類学)
- 197509 「離島の英才教育生徒一人に先生二人の鳩間小」(『文芸春秋』) 48頁

- 197510 「<シリーズ人間>生徒はボク一人先生二人一南の島の小学校の物語ー」(『女性自身』)
- 197602 宮良高弘「祭祀集団と村落社会ー八重山・鳩間島を中心としてー」(九学会連合沖縄調査委員会編『沖縄ー自然・文化・社会ー』弘文堂) 407頁
- 197603 戸川史子「鳩間島の鰐漁と灰盗み」(西郊民俗談話会『西郊民俗』(第74号) 西郊民俗談話会)
- 197607 大城 學「鳩間島の豊年祭」(『沖縄芸能史研究』(創刊号) 沖縄芸能史研究会) 65頁
- 197608 當間一郎「鳩間島の豊年祭」(『琉球新報』1976年8月13日、1976年8月17日、1976年8月18日付)
- 197610 竹富町文化財保護審議会編著『竹富町の文化財』(竹富町教育委員会) →「鳩間中森」37頁、「下り井」38頁
- 197703 「鳩間島」(沖縄歴史研究会『沖縄県の歴史散歩』山川出版社)
- 197706 大城 學「鳩間島と『水』」(『八重山毎日新聞』1977年6月15日付)
- 197706 吉川安一「鳩間島へ海底送を」(『八重山毎日新聞』1977年6月19日付)
- 197711 山田孝子「鳩間島における民族植物学的研究」(伊谷純一郎・原子令三編『人類の自然史』雄山閣出版) 241頁
- 197700 加治工真市「沖縄県八重山鳩間方言動詞の活用」(『人文学報』(No.117)) 1頁
- 197700 「空前の離島ブームというけれど「家・土地つき」でも集まらぬ島民募集<沖縄鳩間島>」(『週刊 明星』) 182頁
- 197700 星野通平「鳩間島—サンゴ礁—」「海と島じま」(東海大学出版)
- 197806 鳩間昭一伝承「病魔払い」(竹原孫恭編著『ばがー島・八重山の民話』大同デザインセンター) 157頁
- 197810 下嶋哲朗「鳩間島」(『沖縄・聞き書きの旅』(刊々堂出版社)) 143頁
- 197810 「南の島・夏に逝った利津子…鳩間島」(『女性自身』(1978年10月12日))
- 197810 崎山律子「鳩間島の真治君への手紙」(『青い海』(No.76 秋季号) 青い海出版社)
- 197800 松本征夫「八重山群島西表島と鳩間島」(『山・探検・フィールドワーク』) 148頁
- 197800 新川 明「鳩間島」(『新南島風土記』大和書房) 109頁→198711、200512
- 197903 高桑史子「八重山鳩間島における信仰体系と系譜観の変化ー過疎化社会における信仰生活の実態ー」(『社』(第10巻第3・4号) 東京都立大学社会人類学研究室) 57頁
- 197900 鳩間島研究サークル編『鳩間島振興開発の課題』(鳩間島研究サークル)
- 198011 「鳩間ー民俗芸能の継承を重視ー」(琉球新報社編『郷友会』琉球新報社) 297頁
- 198000 「<市町村指定文化財>—石垣市・与那国町・竹富町—鳩間中森」(『季刊 沖縄アルマナック』(No.3) 収載)
- 198102 宮良泰平「鳩間節のはやしについて」(『八重山毎日新聞』1981年2月25日付)
- 198103 下地恵三「鳩間節のはやし」(上)(下)(『八重山毎日新聞』1981年3月10日ー3月11日付)
- 198103 大城 學「鳩間島のソーラン」(『八重山の民俗芸能(3) 沖縄県民俗芸能悉皆調査』(第3集) 沖縄県教育委員会) 19頁→200311参照
- 198111 宮良當壯「鳩間節に就いて」『宮良當壯全集』(第13巻) (第一書房) 225頁
- 198111 宮良當壯「鳩間島記事」『宮良當壯全集』(第13巻) (第一書房) 181頁
- 198112 當間一郎「鳩間島の豊年祭」『沖縄の芸能』(オリジナル企画) 441頁
- 198203 下嶋哲朗「鳩間島ー民謡の島にてー」『海原の里人たち』(第3刷) (理論社) 84頁
- 198209 真栄城守定「心残りの島じまーバナリと鳩間ー」『八重山・島社会の風景』(ひるぎ社) 201頁
- 198209 高桑史子「八重山ー島嶼社会における系譜意識の変化ー過疎化による社会変容の一侧面ー」(日

本民族学会編『民族学研究』(47巻2号)

- 198305 『沖縄大百科事典』(下巻) (沖縄タイムス社) → 「鳩間島」(牧野 清) 231頁、「鳩離島」(牧野 清) 231頁、「鳩間島中森貝塚」(高宮廣衛) 231頁、「鳩間島のアイアシ群落」(新城和治) 232頁、「鳩間島の方言」(加治工真市) 232頁、「鳩間節」(宜保榮治郎) 232頁などの項目あり
- 198305 市川重治「鳩間島の手突」「南島針突紀行」(那覇出版社) 187頁
- 198308 沖縄在鳩間郷友会編『鳩間島誌 沖縄在鳩間郷友会十五周年記念誌』(沖縄在鳩間郷友会)
- 198308 當間一郎「鳩間島のミルク世—豊年祭にみる新しい流れ—」(1)(2) (『琉球新報』1983年8月1日、1983年8月2日付)
- 198309 大城 學「祭りを尋ねて鳩間島の豊年祭と久志の村踊り」(『沖縄タイムス』1983年9月19日—9月21日付)
- 198310 沖縄在鳩間郷友会『鳩間島民俗芸能のタベ—郷友会結成15周年記念事業一』(沖縄在鳩間郷友会)
- 198312 加治工真市「八重山鳩間方言の助詞」(『琉球の方言』(第8号) 法政大学沖縄文化研究所) 122頁
- 198310 大城 學「鳩間島の祭祀と文芸—結願祭を中心に—」(『沖縄文化研究』(10) 法政大学沖縄文化研究所) 228頁
- 198402 与那原朝英「鳩間節のハヤシ考—「ティートゥユール」の意味—」(『沖縄タイムス』1984年2月14日付)
- 198400 野本寛一「焼畑地域研究ノート 八重山諸島の焼畑 鳩間島」『焼畑民俗文化論』(雄山閣出版) 571頁
- 198400 大城 學「くらしと祭り—鳩間島の(豊年祭)を中心に行—」(『文化課紀要』(1) 沖縄県教育委員会文化課)
- 198501 森口 豔「島の哀れ—鳩間島との出逢いと別れ—」(『琉球新報』1985年1月31日—2月1日付)
- 198502 森口 豔『子乞い—八重山・鳩間島生活誌—』(マルジュ社)
- 198507 森口 豔「島の移ろい—八重山鳩間島を見つめて—」(『地域と文化』(第31・32合併号) 南西印刷出版部)
- 198509 玉寄雅弘「「鳩間節」など考」(『琉球新報』(夕刊) 1985年9月20日—1985年10月1日付)
- 198511 比嘉朝進「鳩間節の鳩間中森」「親子でたずねる沖縄名所」(沖縄教育出版社)
- 198603 加治工真市「鳩間方言の漁業語彙」(『琉球の方言』(第10号) 法政大学沖縄文化研究所) 1頁
- 198606 鳩間小学校創立九十周年記念事業期成会『鳩間小学校創立九十周年記念誌』(鳩間小中学校)
- 198607 角川地名大辞典編纂委員会編『角川地名大辞典 47 沖縄県』(角川書店) → 「鳩離島」576頁、「鳩間」576頁、「鳩間島」577頁、「鳩間島中森貝塚」577頁などの項目あり。
- 198600 『鳩間島古典民謡・古謡集』(石垣在鳩間郷友会)
- 198708 加治工真市「鳩間節考」(喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会編『八重山文化論叢—喜舎場永珣生誕百年記念論文集—』喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会) 247頁
- 198707 島袋憲一「プール人」(『琉球新報』「落ち穂」欄1987年7月18日付)
- 198710 尾竹俊亮「八重山・鳩間島の天水」(『オタケ君の南島ガイド—島めぐり入めぐり—』海風社)
- 198711 野本寛一「聖地と風景—鳩間島—」(『日本の神々—神社と聖地—』月報(13) 白水社) 1頁
- 198711 新川 明「鳩間島」『新南島風土記』(朝日新聞社) 111頁←197800

- 198802 佐藤惣之助「鳩間ふし」(『琉球諸島風物詩集』(復刻版)) ←192211
- 198811 加治工真市「鳩間方言の農業関係語彙」(『琉球の方言』(第13号) 法政大学沖縄文化研究所)  
160頁
- 198800 田代 浩『鳩間島沿革』(私家本)
- 198912 加治工伊佐、大城 奉『鳩間島における鰐漁—鳩間島産業発達史—』(私家本)
- 198900 坂本盤雄「集落景観の事例 八重山地方 鳩間島」(『沖縄の集落景観』九州大学出版会)
- 198900 野本寛一「離島—その内と外—」(『奄美・沖縄民間文芸研究』(12) 奄美・沖縄民間文芸研究会)
- 199003 加治工真市「鳩間方言 食関係語彙」(『琉球の方言』(14) 法政大学沖縄文化研究所) 32頁
- 199003 富島壯英「鳩間の道」(沖縄県教育庁文化課『沖縄県歴史の道調査報告書 (VII) 一八重山諸島の道一』沖縄県教育委員会) 66頁
- 199003 大城 學「竹富町鳩間島のプールの神歌」(沖縄県教育庁文化課編『沖縄の神歌 沖縄の神歌伝承活動 (III) 八重山諸島—沖縄県文化財調査報告書第95集—』沖縄県教育委員会) 20頁
- 199006 牧野 清『八重山のお嶽』(あーまん企画) → 「167 友利御嶽」371頁、「168 ひない御嶽」374頁、「169 前泊御嶽」376頁、「あらか御嶽」377頁、「西堂御嶽」377頁、「鳩間島御嶽位置略図」377頁、「鳩間島のお嶽概説」378頁。
- 199007 目崎茂和「鳩間島—「波止」間の島?—」(『南島の地形—沖縄の風景を読む—』(第2刷) 沖縄出版) 142頁
- 199008 金城栄蔵「鳩間島の村建」(『八重山毎日新聞』1990年8月9日付)
- 199010 中山盛茂・富村真演・宮城栄昌『のろ調査資料 (一九六〇年—一九六六年調査)』(ボーダーインク) → 「友利御嶽の本司 加治工千代」235頁、「ヒナイ御嶽の司 花城イカ」242頁、「新川お嶽の司 花城 光」243頁、「前泊御嶽の司 吉川ノブ」245頁、「西堂御嶽の司 米盛クヤマ」246頁
- 199000 野本寛一「離島—鳩間島へ—」『神々の風景 一信仰環境論の試み—』(白水社)
- 199012 大城 弘『島の夕ぐれ』(トップ沖縄)
- 199109 本田安次『沖縄の祭と芸能』(第一書房) → 「鳩間島の蒲葵の木」25頁、「鳩間島の豊年祭」99頁、「鳩間島のアンガマ」120頁、「鳩間島の結願祭」193頁、「鳩間島の種取り」213頁、「鳩間島の獅子舞」304頁
- 199203 「鳩間のカツオ漁」(『竹富町史だより』(創刊号) 竹富町)
- 199203 「鳩間節」(『琉球芸能事典』那覇出版社) 685頁
- 199203 大山了己「鳩間島の漁撈 一伝統的漁撈と生態学的背景—」(『沖縄民俗研究』(第11・12号) 沖縄民俗学会) 33頁
- 199103 加治工真市「鳩間島の住関係語彙」(『琉球の方言』(第15号) 法政大学沖縄文化研究所) 51頁
- 199203 加治工真市「鳩間方言の祭祀関係語集 (1)」(『琉球の方言』(第16号) 法政大学沖縄文化研究所) 56頁
- 199303 加治工真市「鳩間方言の祭祀関係語集 (2)」(『琉球の方言』(第17号) 法政大学沖縄文化研究所)
- 199403 田代 浩『蒲葵の下で』(私家本)
- 199407 「鳩間島」(沖縄歴史研究会『新版 沖縄県の歴史散歩』山川出版社)
- 199400 大山了己「音楽からみた八重山の海辺社会—鳩間島のブーリを中心に—」(『日本民俗学会』(1

- 97) 日本民俗学会)
- 199500 本木修次「里親の島に教育のまことを見る・・・鳩間島」『小さな離島へ行こう』(ハート出版)
- 199502 加治工真市「鳩間方言の人体関係語彙(1)」(『琉球の方言 18・19合併号』法政大学沖縄文化研究所) 215頁
- 199508 高城 隆「鳩間島から」『花綵列島—民俗と伝承—』(木犀社) 12頁
- 199602 小濱光次郎『鳩間島追想』(私家本)
- 199603 竹富町史編集委員会、町史編集室「六 鳩間島」『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』(竹富町) 831頁
- 199603 鳩間ヒヤマ「戦さ場の実相 空襲を避けて農作業」(『竹富町史だより』(第9号) 竹富町) 10頁
- 199603 鳩間昭子「戦さ場の実相 避難途中に敵機来襲」(『竹富町史だより』(第9号) 竹富町) 11頁
- 199603 野入直美「ゆうつと希望を合わせ持つ島「鳩間島」から、さまざまな場面が見えてくる。」(まぶい組『<沖縄・奄美プライベート・ブックレビュー100>島立まぶい図書館からの眺め』ポーダーインク)
- 199604 「西表島に存在する鳩間島の郷友会」(『情報 やいま』(No.46) 南山舎)
- 199606 松田良孝「慰靈の日特集 西表へ逃げた鳩間の人たち」(1-6) (『八重山毎日新聞』1996年6月18日1996年-6月23日付)
- 199608 大田静男「鳩間島の『慰靈之碑』—激しい空襲で対岸の西表島に強制疎開—」『八重山の戦争—シリーズ・八重山に立つ No.1—』(南山舎) 143頁
- 199701 ウェイン・ローレンス「鳩間方言のアクセント—名詞—」(沖縄文化協会『沖縄文化 第32巻 1号 (通巻85号)』沖縄文化協会)
- 199703 宮良當壯「鳩間島記事」(『竹富町史だより』(第11号) 竹富町) 12頁←192701
- 199705 島袋憲一「鳩間島便り④ 9年ぶりの入学式に島中が湧く鳩間島」(『情報 やいま』(No.58) 南山舎)
- 199706 鳩間小学校創立百周年記念誌編集委員会編『鳩間小学校創立百周年記念誌 波濤を越えて』(竹富町立鳩間小学校)
- 199707 島袋憲一「鳩間島便り⑤ バード・フライ アイランド鳩間—野鳥と蝶の楽園・鳩間島—」(『情報 やいま』(No.60) 南山舎)
- 199709 島袋憲一「鳩間島便り⑥ ブール色(豊年祭)に染まる島」(『情報 やいま』(No.62) 南山舎)
- 199711 島袋憲一「鳩間島便り⑦ 台風13号 島の海を襲う」(『情報 やいま』(No.64) 南山舎)
- 199712 外間守善「シドニーオペラハウスでの「鳩間節」」(佐藤太圭子『佐藤太圭子 華の舞ごころ—琉球舞踊に生きて—』)
- 199712 佐藤太圭子「鳩間節」(佐藤太圭子『佐藤太圭子 華の舞ごころ—琉球舞踊に生きて—』)
- 199700 羽根田治『パイヌカジ—沖縄・鳩間島から—』(山と渓谷社)
- 199805 谷川健一「[ハト] 鳩間島と鳩離島」『統 日本の地名—動物地名をたずねて—』(岩波書店)
- 199807 加藤賢治「鳩間島便り10 豊年祭」(『情報やいま』(No.71) 南山舎)
- 199811 比嘉朝進「友利御嶽」『沖縄の拝所300』(沖縄総合図書)
- 199800 大工義紀、加治工仁、大城 肇編『郷友会結成三十周年記念誌 きずな—三十年のあゆみ—』(沖縄在鳩間郷友会)
- 199803 加治工尚子『八重山郡島竹富町鳩間島の民話—沖縄国際大学文学部国文学科平成九年度卒業論文—』(沖縄国際大学文学部国文学科)

- 199808 小濱光次郎『音高符号付 鳩間島古典民謡古謡集工工四』(私家本)
- 199800 本木修次「鳩間島(沖縄) 里親制度さきがけも」『小さい島の分校めぐり』(ハート出版)
- 199903 「〈文化財探訪〉鳩間中森」(『竹富町史だより』(第15号) 竹富町) 15頁
- 199906 勝連繁雄「鳩間節」「わかりやすい 歌三線の世界—古典の世界—」(ゆい出版)
- 199907 外間守善「ハトマ(鳩間)の語源—鳩間島に架ける夢—」(『沖縄学 沖縄学研究所紀要』(第3号) 沖縄学研究所) 4頁
- 199908 崎原恒新『八重山ジャンルごと小事典』(ボーダーインク) → 「あらか御嶽」93頁、「石垣在鳩間郷友会」186頁、「大泊貝塚」136頁、「中森貝塚」145頁、「西堂御嶽」112頁、「鳩間島」44頁、「鳩間島漁業組合」179頁、「鳩間小中学校」204頁、「鳩間灯台」247頁、「鳩間中森」81頁、「鳩間郵便局」224頁、「ヒナイ御嶽」116頁、「前泊御嶽」119頁、「屋良貝塚」153頁などの項目あり。
- 199911 吉川安一「故郷・鳩間島の歌謡」『琉球文学 南島歌謡の風土』(大里印刷) 264頁
- 199900 森口 豔「島を救った子供たち 孤島・鳩間島哀史」『沖縄 近い昔の旅 非武の島の記憶』(凱風社)
- 199900 小松正史「フィールドノート 主観的音聴取作業に基づいたサウンドスケープ調査 一沖縄・鳩間島のフィールドワークから—」(『サウンドスケープ』(1) 日本サウンドスケープ協会)
- 200009 田代安定編「八重山管内宮良間切鳩間島巡検統計誌」(『竹富町史だより』(第18号) 竹富町) 5頁→188500参照
- 200001 森口 豔『子乞い—沖縄 孤島の歳月—』(凱風社)
- 200007 加藤賢治「話題の「鳩間の港」がついに CD に」(『情報 やいま』(No.85) 南山舎)
- 200008 藤田 正「明治のポップ・ミュージック「鳩間節」「沖縄は歌の島—ウチナー音楽の500年—」(晶文堂) 84頁
- 200010 三木 健「島出身研究者の島おこし提言—鳩間島研究サークル編『鳩間島振興開発の課題』—」「島の存亡をかけた『子乞い』のドラマ—森口 豔『子乞い 八重山・鳩間島生活誌』—」「八重山を読む—島々の本の事典— シリーズ・八重山に立つ No.2』(南山舎)
- 200011 飯田泰彦「鳩間節」(『沖縄タイムス』『唐獅子』欄2000年11月8日付)
- 200000 森口 豔「沖縄・孤島の新地図(3) 鳩間島『元気』をくれる過疎の島」(『週刊 金曜日』(8-25))
- 200103 崎浜 靖「西表島・新城島・鳩間島 一その地理的概観一」(『八重山、竹富町調査報告書(3) 地域研究シリーズNo.29』沖縄国際大学南島文化研究所)
- 200103 「鳩間小学校沿革」(『學務書類綴(その一)』『竹富町史だより』(第19号) 竹富町) 15頁
- 200103 勝連繁雄「鳩間節」『琉球舞踊の世界—私の鑑賞法—』(ゆい出版)
- 200104 「鳩間島の里子が漫画に—コミック誌で連載スタート—」(『琉球新報』2001年4月22日付)
- 200107 森田純一「唄者という生き方」(天空企画編『沖縄的人生—南の島から日本を見る—』光文社)
- 200108 宇江城正晴「戦時下の父」『宇江城正喜を偲ぶ』(私家本) 37頁
- 200108 大浜 節「宇江城正喜校長先生の思い出」(宇江城正晴編著『宇江城正喜を偲ぶ』(私家本)) 105頁
- 200108 鳩間昭子「宇江城正喜校長の最期」(宇江城正晴編著『宇江城正喜を偲ぶ』(私家本)) 109頁
- 200100 森口 豔・尾瀬あきら「沖縄・孤島の新地図(番外編)『夏子の酒』の尾瀬あきら氏と鳩間島で対談」(『週刊 金曜日』(9-33))

- 200203 羽根田「二十歳の門出」(『情報 やいま』〈No.111〉南山舎)
- 200205 羽根田幸江「鳩間島 旅立ちの3月」(『情報 やいま』〈No.113〉南山舎)
- 200205 八重山地域情報センター編『あかがーら』(第23号) (石垣市立図書館) → 「浜千鳥一鳩間千鳥節、浜千鳥節、千鳥飛ぶ一」(飯田泰彦) 2頁、「鳩間中岡一鳩間節一」(マット=ギラン) 7頁、「鳩間島の学校行事」(高木健一郎) 8頁、「5月の放浪者」(大田将之) 9頁
- 200200 加治工真市「八重山・鳩間島方言」(『国文学 解釈と鑑賞』(67-7) 至文堂)
- 200301 羽根田幸江「そこで終らないのが鳩間」(『情報 やいま』〈No.121〉南山舎)
- 200306 羽根田 治「鳩間島 一過疎化・高齢化にたちむかう、小さなサンゴ島の豊年祭一」(『別冊 太陽 日本の島 島宇宙が育む日本文化、再発見』平凡社)
- 200310 鈴木崇之・加藤彰彦「鳩間島における養育里親および海浜留学制度について(その1) — 第1回フィールドワーク報告一」(『沖縄大学地域研究所所報』〈No.30〉沖縄大学) 109頁
- 200311 大城 學「鳩間島の豊年祭の儀礼と歌謡」847頁、「鳩間島の盆踊り」523頁、「沖縄の祭祀と民俗芸能の研究」(砂子屋書房)
- 200303 真喜屋 力「八重山の過疎の島は1年に一度人と唄であふれかえる」(沖縄ナンデモ調査隊編『沖縄島唄読本』双葉社)
- 200309 吉川安一「鳩間島の古謡と人頭税制度」(『人頭税廃止百年記念誌 あさばな』八重山人頭税廃止百年記念事業期成会) 125頁
- 200300 カベルナリア吉田「八重山観光フェリー かりゆし 人口約50人。離島の中の離島を目指して小さな船が漕ぎ出でる」『スロー・トラベル 島めぐりフェリーで行こう!』(東京書籍)
- 200300 高橋誠一「八重山古地図による集落の復原 鳩間島・西表島の集落」『琉球の都市と村落』(関西大学東西学術研究所)
- 200300 得能壽美「近世八重山における通耕と『村』—鳩間島をモデルタイプに—」(『沖縄文化』(第95号) 沖縄文化協会) 78頁
- 200406 大工義紀「サンゴの産卵」(『琉球新報』「ティータイム」欄、2004年6月17日付)
- 200409 通事孝作「ブンヤー考」(『琉球新報』「落ち穂」欄、2004年9月28日付)
- 200400 カベルナリア吉田「八重山諸島その② 西表島と周辺の小島たち 一西表島・由布島・新城島・鳩間島— 西表ジャングルの隙間から、お豆みたいな小島が見え隠れ」「沖縄の島へ全部行ってみたサー」(東京書籍)
- 200400 長鷗俊介「鳩間島 一度行くと、他人の島ではなくなる」『島 日本編』(講談社)
- 200504 羽根田 治「生まり島の祭りにたぎる島人の血—鳩間島の豊年祭を見続けて—」(『別冊山と渓谷 通巻439号 琉球ブック2005』山と渓谷社)
- 200506 『瑠璃の島』(日本テレビ放送網株式会社)
- 200507 磯和俊宏『鳩間島 磯和俊宏写真集』
- 200509 はいの 晓「「子乞い」から23年の鳩間島(続) 鳩間島から見えるもの①—島人と観光客・移住者の落差—」(『情報 やいま』〈No.150〉南山舎)
- 200512 新川 明「鳩間島」『新南島風土記』(岩波書店) ←197800
- 200500 斎藤 潤「鳩間島 星砂の多い楽園」『沖縄・奄美〈島旅〉紀行』(光文社)
- 200500 鈴木正輝ほか『不登校だったボクと島の物語』(ふきのとう書房)
- 200500 森口 豪「元気をくれる過疎の島—鳩間島—」『だれも沖縄を知らない—27の島の物語り—』(筑摩書房) ←200000

- 200705 「インタビュー 八重山×人68 加治工 勇一鳩間島の唄者ー」(『月刊 やいま』(No.168) 南山舎)  
22頁
- 200705 鳩間 神「鳩間島音楽祭」(『月刊 やいま』(No.168) 南山舎) 32頁
- 200700 鈴木三吉「離島の輝き 鳩間島」『海と島の思想 一琉球弧45島のフィールドノートー』(現代書館)
- 200905 砂川哲雄「鳩間島音楽祭」(『八重山毎日新聞』「不連続線」欄2009年5月7日付) →201101参照
- 200905 安本千夏「八重山の染織 第14回 寄合富一鳩間の夢を手技に託すー」(『月刊 やいま』(第190号) 南山舎) 24頁→201509参照
- 200900 藤井美加「過疎地域における学校の影響力—沖縄県・鳩間島の海浜留学を事例にー」(『奈良女子大学社会学論集』(16) 奈良女子大学社会学研究会) →201003
- 201003 栄沢直子「離島における地域社会の維持・存続—沖縄県竹富町鳩間島を事例としてー」(『闘う地域社会—平成の大合併と小規模自治体ー』ナカニシヤ出版) 156頁
- 201003 藤井美加「沖縄県・鳩間島における学校存続運動」(『闘う地域社会—平成の大合併と小規模自治体ー』ナカニシヤ出版) 125頁
- 201003 園田浩二、瀬底 言「鳩間島における漂着ごみの資源化への試み—発泡スチロールの油化装置の目的ー」(『沖縄大学人文学部紀要』(第12号) 沖縄大学) 117頁
- 201101 砂川哲雄「鳩間島音楽祭」『八重山風土記—やいま文庫11ー』(南山舎) 208頁←200905
- 201103 加治工真市「鳩間島のブル（豊年祭）の構造的意味」(『竹富町史だより』(第32号) 竹富町教育委員会) 8頁
- 201103 通事孝作「むかし八重山 友利御嶽に集まつた神司たち」(『月刊 やいま』(No.210) 南山舎)  
54頁
- 201108 大城公男『八重山 鳩間島民俗誌 一琉球弧叢書25ー』(榕樹書林)
- 201111 犬俣恵一「書評 大城公男著『八重山 鳩間島民俗誌』—情熱の語りと貴重な見解ー」(『琉球新報』2011年11月27日付)
- 201205 「やいま昔語り 鳩間真吉さん(82) —15歳軍属の戦争体験ー」(『月刊 やいま』(No.223) 南山舎) 32頁
- 201206 栄沢直子「離島における地域課題の解決方途としてのガバナンス 一鳩間島の島興しを事例としてー」(杉本久未子・藤井和佐『変貌する沖縄離島社会 一八重山にみる地域「自治」ー』ナカニシヤ出版) 57頁
- 201207 加藤庸二「鳩間島 一のどかな鳩間島は今も昔も変わらずー」『原色ニッポン《南の島》大図鑑 一小笠原から波照間島まで114の「楽園」へー』(五百井健至)
- 201212 上地将英「鳩間ハロウィン」(『月刊 やいま』(No.230) 南山舎) 45頁
- 201310 飯田泰彦「八重山芸能への招待⑦ 千鳥節一波越え潮越え飛ぶ千鳥ー」(『月刊 やいま』(No.239) 南山舎) 47頁
- 201404 吉川安一「『黄金芸場 一人公演』と高齢者社会」(『八重山毎日新聞』2014年4月13日付)
- 201408 飯田泰彦「八重山芸能への招待⑯ 鳩間節の七変化」(『月刊 やいま』(No.248) 南山舎) 40頁
- 201408 新盛基史「八重山の豊年祭」(『沖縄タイムス』「唐獅子」欄2014年8月4日付)
- 201410 飯田泰彦「島々美しや・鳩間島 前ヌ浜」(『モモト』(vol. 20) 東洋企画) 63頁
- 201503 名嘉嶺恭一「学校紹介！ 竹富町立鳩間小中学校」(『月刊 やいま』(No.254) 南山舎) 45頁
- 201503 ロジャー=バルバース『星砂物語』(講談社)

- 201503 竹富町史編集委員会編『竹富町史 第六巻 鳩間島』(竹富町)
- 201504 得能壽美「『竹富町史 第六巻 鳩間島』の編集・発刊によせて—鳩間世ぬ直らば・友利世ぬ稔らば—」(『八重山日報』2015年4月27日、4月29日付) →201603 j 参照
- 201505 飯田泰彦「時空を越える千鳥」(『月刊 やいま』(No.256) 南山舎) 45頁
- 201506 a 照屋 理「書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』」(『八重山毎日新聞』2015年6月1日付) →201603 参照
- 201506 b 波照間永吉「書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』—「神の島」への思い凝縮—」(『沖縄タイムス』2015年6月6日付) →201603 j 参照
- 201507 赤嶺政信「書評『竹富町史 第六巻 鳩間島』—先人の歩み まるごと記録化—」(『琉球新報』2015年7月19日付) →201603 j 参照
- 201509 安本千夏「鳩間の教えに寄る人々 寄合富」「島の手仕事—八重山染織紀行—」(南山舎) ←200905
- 201603 a 飯田泰彦「《鳩間節》の展開とその背景」(『沖縄芸術の科学』(第28号) 沖縄県立芸術大学附属研究所) 17頁
- 201603 b 『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』(沖縄県立博物館・美術館 博物館班)
- 201603 c 仲里 健「鳩間島・黒島・新城島(上地・下地)の地質」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 1頁
- 201603 d 山崎仁也、横田雅嗣、知念美香、仲宗根忠樹、比嘉清文、加島幹男「鳩間島・新城(上地・下地)島・黒島の植物相(FLORA)」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 13頁
- 201603 e 山崎仁也、松村雅史、吉田和久、力身恭二、目黒賢児「鳩間島・新城(上地)島・黒島の動物相(FAUNA)—昆虫相を中心—」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 69頁
- 201603 f 片桐千亜紀、岸本 敏「鳩間島・新城島(上地)の古墓調査」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 81頁
- 201603 g 岸本弘人、石垣 忍「鳩間島・黒島・新城島における石碑・記念碑等の調査報告」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 109頁
- 201603 h 崎原恭子「近世琉球における烽火(火立)のネットワークについて—新城島・黒島・鳩間島を中心に—」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 147頁
- 201603 i 園原 謙「鳩間島、黒島所在・由来の三線」(『鳩間島・新城島・黒島総合調査報告書』沖縄県立博物館・美術館 博物館班) 153頁
- 201603 j 「『竹富町史 第六巻 鳩間島』書評集」(『竹富町史だより』(第37号) 竹富町教育委員会) 3頁←201504、201506 a、201506 b、201507
- 201606 奥田愛基『変える』(河出書房新社) →「離島での生活の始まり」46頁、「リストカット」49頁、「『民主主義』の原点」51頁
- 201608 安本千夏「沖縄県八重山諸島、鳩間島の染織—寄合富さんの聞き書きによる—」(佐藤能史編『染織情報α』(No.414) 染織と生活社) 2頁

## 島に貢献した3人の先生方

吉川 英治

(鳩間島編専門部会委員)

鳩間島の地域発展には、小中学校に赴任してきた、先生方の力も欠かせない。ここでは鳩間島出身ではない先生方のなかから3人の先生を紹介したい。

西表島網取村出身の山田武三先生（1889年（明治22）生まれ）は、鳩間島に教員・校長として13年間勤務した。子どもたちの学校教育はもちろん、卒業後の進路や将来のことまで懇切に指導し、島人からの人望も厚かった。また、いろいろな相談にも知識者として対応し、島人の社会教育の向上に尽力した。

山田先生は、1938年（昭和13）の竹富村会での村長選挙の結果、当選した。当初、教職を継続するつもりであった先生は、村會議員の要請があり、第9代竹富村長に就任した。1948年（同23）には山田書店を創設し、文房具、雑誌、書籍などを取り扱った。八重山においては、沖縄本島や本土からの文化的な情報を提供し、八重山文芸復興に貢献した。1972年（同47）、勲六等旭日章の叙勲を受章している。

石垣市大川出身の新城安信先生（1925年（大正15）生まれ）は、鳩間尋常小学校で教鞭を執った。退職後は鳩間島で最初の郵便業務（集配人）を務めた。また、1921年（同10）に初代漁業組合長に就任し、漁業組合を通じて、地域発展に貢献した。その他、区長業務に従事したり、行政面などの多くの要職を歴任した。

石垣市大川出身の宇江城正晴先生（1930年（昭和5）生まれ）は、第23代鳩間小学校長として、1977年（同52）年から1980年（同55）までの3年間勤務された。1974年（同49）は、生徒数が1人となり、鳩間校が廃校か存続かと問われ大きく揺

れた年でもあったが学校を絶やしてはならない思いと、島人や教育機関や郷友会の温かい励ましと支えによって、1979年（同54）年度は在籍数が4人となり、廃校を乗り越えた。

また、宇江城先生の赴任した年に、干ばつが4ヶ月も続き水問題に直面した。そのとき、先生は鳩間島の人々の水不足の現状を教育機関に陳情要請文を配布して訴えた。これが功を奏し、八重山小中学校長会、竹富町校長会、八重山教育長会などから次々と陳情要請があった。それをマスコミが大々的に取り上げ、世論を盛り上げたことも注目できる。

島では公民館長・鳩間昭一、区長・西原章吉、大工定市たちとともに「私たちにも命水を下さい」と海底送水実現に向けて懸命に取り組んだ。1978年（同53）6月28日、沖縄開発庁・佐藤信二政務次官一行が鳩間島を訪ねて「海底送水の実現」を約束した。その結果、1980年（同55）7月1日、西表島から海底送水による給水が開始され、島人の念願が実現した。

現在、水に不自由しない文化的な生活が送られることを思うとき、当時のことを忘れてはならない。学校存続や島の発展、特に海底送水を実現させた宇江城正晴先生の功績は大きい。

なお、宇江城正晴先生の父・宇江城盛喜は、鳩間国民学校校長および鳩間青年学校長として1943年（同18）3月から1945年（同20）6月まで勤務し、親子2代にわたり鳩間の学校教育に挺身したことでも特記できる。

# 戦争と黒島

玻座真 武

2015年（平成27）は戦後70年の節目でしたが、私は戦争体験者一人として、時の流れのなかで戦争体験が風化していく焦燥感を抱きました。戦争の実相を後世に正しく伝えるべく、一人一人の戦争体験を、時代という大きな流れのなかで認識するための努力が今こそ必要であると感じました。

『竹富町史 第12巻 資料編 戦争体験記録』（2008年発行）には、多くの戦争体験談が寄せられていますが、黒島からは前底光雄、玉代勢タツ子、宮良長義、船道賢範、東兼久正次、比屋定小町、登野城ウメ、内原キク、島仲信子、知念竹子、竹越堅一、比屋定弘、島仲清志、野崎高輝、運道武三、仲盛岩義、當山哲男、宮良当吉、仲盛富太郎の19名が寄稿されています（書き書きも含む）。

本稿では、これらに補足する意味で、自らの体験を記すとともに（「1. 私の戦争体験記」）、船道貞子さん（2. 戦争体験談）、宮喜清さん（3. 戦争体験談）のお話を記録することにしました。

また、「戦後70年体験座談会」として、2015年6月17日に開催した座談会の模様を収録することによって、平和への礎を積み重ねることに供したく存じます。

体験談、座談会の文責はすべて玻座真 武であることを、予め断っておきます。

## 1. 私の戦争体験記 玻座真 武

### （1）前内野家兄弟姉妹の死

1945年（昭和20）当時、私は8歳で、小学校2年生でした。あの時の恐怖とショックは、67年経過しても脳裏に焼きついて忘れられません。今もあの出来事が鮮明によみがえるのです。

当日の朝、私は1年生や3年生と一緒に遊んでいました。同級生の前内野チエ子さんも、弟の昇ちゃんをおんぶ（背負って）して、村の中央にある集会場（前屋敷は前内野の住宅）の広場で遊んでいました。3年生のお兄さんがウブメー（現在、「ウミガメ研究所」）で50cmぐらいの「カニの穴」を見つけたと、まるで大発見でもしたように、誇らしげに話されました。私はそんな深いカニの穴は見



戦後体験座談会（2015年）

たことがないので、「それは嘘ではないか」とお兄さんに言いました。「それでは見に行こう」ということになり、チエ子さんも誘いましたが、弟を守しているので行かないと家へ帰りました。

これが遊び仲間の最後の別れになるとは知らず、先輩と村外れのウブメーに向かいました。そして、そのカニの穴を確かめました。数分後、ゴーゴーと戦闘機の音とともに東の空に飛行機軍団が見えました。畑作業をしている方や私たち子どもも急いで岩穴にもぐりこみました。

それから30分～50分ぐらい経ったでしょうか、飛行機の音が止み、みんなはそれぞれの避難小屋へ駆け込みました。私は、約1km離れたアダン原の共同避難小屋へ向かい、泣きながら道端の草むらに伏せたり、畔を乗り越えながら、やっとの思いでたどり着きました。すると母をはじめ姉たちは、

「武がいない」と泣いていました。彼女たちは私の顔を見るなり喜んだものの、その後は散々怒られました。そこで徴兵されない親戚のおじさんから、戦争についていろいろと説教され、夕方避難小屋から各自帰っていました。

その後、前内野家の7名兄弟のうち6名が防空壕真上の爆撃によって即死したという話を聞きました。愛子（二女）、武（長男）、博（二男）、チエ子（三女）、節子（四女）、昇（三男）が亡くなりました。同級生のチエ子は「ばあちゃん痛いよ、痛いよ」と虫のような、か細い声を最後に息を引き取つたといいますが、との5名は即死状態のことでした。

母親は末っ子の昇ちゃんの1歳を待たずに亡くなられ、昇ちゃんは祖母と父に育てられました。その父は徴兵される前、家の裏は集会場で、家屋も大きく目立って危険だから、南の道路を越えた畑で防空壕を造り、空襲警報のときは、この防空壕に入りなさいといって兵隊に行かれたようです。

その後、子どもたちは夜になると怖がるのですが、父親が危険だからといった場所にもかかわらず、徴兵されていない叔父さんを頼って防空壕を造り、いつもそこを使用していたようです。

その時も兄弟たちは、それぞれで遊んでいたが6名の兄弟はその防空壕に流れ込んだのです。長女の初子さんはウイ道のアダン原でイモ掘りしていたのでその難を逃れました。祖母は仲本村の親戚へ用事で出かけていて、孫たちのことが心配で急いで帰ってくると、あの光景に・・・。三女のチエ子は、まだ生きていたというのです。カニの穴の深さに納得しない私の頑固さによって命拾いをしました。

## （2）疎開と山川隊長

軍命により、黒島住民は西表島東部のカサ崎を中心に宮里、仲本、保里、東筋、それに由布島、古見へ疎開することになりました\*。4月から疎開が始まり、各村々は避難小屋での集団生活を強いられました。

島から避難小屋へ食糧を運ばねばならず、各村々は困難を極めました。徴兵によって島に若者はおらず、残っているのは、年寄り、6年生以下の子どもたち、障害者がいるだけでした。

各家から割り当て当番を出し、5名が飛行機の飛来や爆音の合間に、イモや野菜など食糧をかき集めました。それらを夜になってバーリ（爬竜船）に荷積し、カサ崎を目指して漕ぎだしました。漕ぎ手は老人や障害者、婦人たちで何時間かかったか定かではありません。

私が漕ぎ手となったのは、玻座真家は長男・長栄が兵隊に徴兵されたので、耳が不自由な母は私を常に自分の側におき、飛行機や空襲警報を知らせる役目を与えたのです。また、食糧集めや運搬も私がその役を担いました。

いつもは日が沈むと、明かりは月や星を頼りにしていました。ところがある日の夜、途中で機雷を発見し、危うくぶつかれば全員が命を落とすというところでした。それで村の老人たちは、昼間に舟で西表島へ渡りました。

そのときの山川軍曹の説教、体罰は凄まじいものでした。というのは、暑い砂浜に老人や足の悪い障害者をおきぎりにしたのです。20代の山川軍曹の形相は身震いするほどで、今もって絶対許すことができません。

島では、家畜をすべて処分せよと山川が命令しました。その理由は、家畜を残しておけば、米英畜生が食糧にするからとのことです。農耕のためにと思って大切に飼っていた牛を、フズマリの西のヤラブ木の下で、村人が燻製にするため、一晩中寝ずに焼いたことを母はしっかりと覚えています。同時に、あれだけの牛を処分するので、骨や内臓をもらおうとする者もなく、それらは埋めて処分されました。戦後逃げた牛が島の復興に役立ったことも記しておきたい。

### (3) 戦後の暮らし

沖縄が全滅したといわれる6月23日、そして広島に原爆が落とされた8月6日、長崎に原爆が落とされた8月9日、日本が全面降伏した8月15日を経て、県内外はもちろん、アジア諸国、中国、朝鮮、シベリアからの帰還兵たちによって、島の人口は一挙に膨れ上りました。すると食糧は益々不足し、家々の裏座は兄弟や親戚で満杯状態になった。

イモの収穫は間に合わず、大人も子どもも「ムイウン」を捜し求めました。さらに「ソテツの実」やがて「ソテツの元」まで食べざるを得ず、「ソテツ地獄」と呼ばれる時代を迎えるのです。

帰還した青年は、青年団を組織し、朝作業やユイマールで農作物の増産に精を出しました。一方、破壊された校舎を島中総出で復旧しました。カヤ葺きの教室を校庭の空いているところに建てました。小学校は1年生から6年生までで、その後6・3・3制の新学校制度が制定されました。戦後は昭和14～15年生まれが入学し、全学年が正常化されました。

### (4) 学校生活

私が1年生のときは戦争中で入学式も記憶にありません。ただなんとなく「宮城に向かって一同礼」の号令で、東へ向かって礼拝したことだけは覚えています。一年生のときは、学校へ行くのがいやで、今でいう不登校生でした。

2年生は戦争で学校へ行くこともなく、3年生になると自分でも気づくほどの大変化が現れました。なんと学校が面白く、楽しい場所になったのです。父を知らずに母一人で兄姉の末っ子として駄々をこね、毎日母親を困らせていました。また、「ンーマヌファ」(馬の子)と言われるほど、母親から離れない子でもありました。

敗戦によって、二男家族が我が家の一一番座と裏座で、三男家族が叔母の家の一番座と裏座で暮らすことになりました。それぞれ大所帯でした。父は私が5ヶ月のときにマラリアが元で他界したのですが、二男三男の叔父がいることをはじめて知りました。また、従兄弟たちの流暢な本の読み方に感動しました。

3年生になると、担任の西表真雄先生（今では叔父）に掛け算九九で誉められ、そのことを母に話

すと褒美に大きな「天ぶら」をもらったりしました。そんなことから学校が好きになり、日課であるヤギの草刈りを終えると、予習・復習をするのが習慣となり、新制中学校4期生として八重山高等学校に合格しました。これをきっかけとして、高校進学の道を島の後輩へと道を開いたものと思います。父母や地域社会の進学に対する意識も変化し、現在では全員が進学するようになりました。

\* 「沿革誌 黒島初等学校」によると、当時の状況について、1945年2月には西表島東部カサ崎を中心に各部落各班から避難小屋建築のために出発したとのことである。宮良長義校長、西表真雄教諭は状況調査のために出張し、2月中旬には非難小屋完成して帰島している。卒業式は3月23日、空襲のため午後6時より校庭の松の木の下で行なわれた。4月1日に挙行された入学式についても、「一年生の入学式は月明を利用して校庭の松の下で挙行 昼間は空襲はげしく児童も入学の喜びの姿なく 今日一日生き残ったというような気持ちであった」と記されている。

## 2. 戦争体験談 船道貞子（1930年生、当時高等科1年）（聞き書き）

私は、当時高等科1年生で、一日の半分は防空壕堀りと避難訓練が日課でした。当時、夜は竹槍訓練や軍歌を歌うなど、軍国教育は、あらゆるところに浸透していました。

村の道の十字路では、米英のルーズベルト大統領やチャーチル首相の藁人形を作り、それを竹槍で突いて志氣を高めていました。学校では米国機のB29の音の聞き分け方も訓練しましたが、今思い出すと戦争ごっこのような勉強でした。

黒島大空襲は日曜日のことでした。この日は宮里村の前内野さん6人兄弟姉妹が防空壕に避難したところに、爆弾が直撃し、尊い命が奪われました。

それは「パノル」という、雨の後畑に生える藻を取りに、5～6人で出かけたときのことです。南東の方からB29の敵機が飛んできました。走りながら側の林の中に突っ込んで伏せました。その日は、学校をめがけて何十発も爆弾が落とされました。日曜日だったので、多くの子供たちが犠牲にならかっただけは、不幸中の幸いでした。

戦争も日増しに激しくなり、避難命令で私たちは、西表島東部の古見のカサ崎に疎開しました。学校の書類を宮良長義校長先生が学校の書類を由布島に運ぶのを、私のはか二人でお手伝いしました。

学校には、教員だったでしょうか、山川さんが玉代勢太郎さん宅で下宿していたのですが、次第に軍の命令を島民へ押し付けてくるようになりました。

昭和2年、3年生まれまでは、自保飛行場へ軍人として徴用されました。島に残っている兄たちは、山川の青年部に協力しました。昼は動けないので、保里のアサビシバナの岩陰に隠れ、夜になると各家から食糧を集め、桟橋から軍の船ダイハツで避難地へ食料運搬の手伝いをしました。そのときの事故により、兄の東舟道博は、船と岩にはさまれて右腕を失うという悲劇にみまわれました。その後、兄はおよそ60年間片腕で農業や諸活動をされましたが、83歳のときに亡くなられました。兄は村の役職でも活躍し、島民からも尊敬されていました。

### 3. 戦争体験記 宮喜 清 <1928年生、当時高等女学校従軍看護婦> (聞き書き)

#### (1) 男尊女卑の時代

昭和10年に黒島小学校1年生になったさ、50名おった。あの頃、男女の差があつてよ、男は女人の人を人と見なかった。ウチの姉さん二人が使丁といってよ、学校の小使いやつたさ。姉さんが言ったよ。

「キヨちゃん、ウチなんか働いてお前一人でも高校に出したい、トップきて勉強やれ」と。これが頭から落ちないから、よーしと思ってよ、一生懸命勉強したら、やってやれないことはないさ。2年生からの試験はみんなまるまる百点さ。

筆筒の引き出しにみんな入れてあつたけど、戦争で飛ばされたさ、こっち大変だったよ。仏壇の柱に機銃が入ってよ、後ろの柱までとばしてあつたど。

戦争が終わって男女共学になったさね。ウチあれ聞いてが嬉しかった。いつもよ女のくせにといわれていたからよ。いつもよ。男の人に「お前は百点とて威張って歩くな」といわれた。そういわれたけど「お前なんか威張るな」と心ではそう思っているさ。するいなと思う。

あの頃、歌はみんな戦争の歌でしょう。「勝ってくるぞと勇ましく誓って國を出てからには・・」。特攻隊というのよ。年齢ははウチらと同年齢ぐらい。「勝ってくるぞと勇ましく」とゆくけど、勝つてこないよ、コレ。片道の燃料しか入れてなかつたから、死ぬんだよ。それをあんなに喜んで、はあ。

「岩壁の母」のように、親はいつかは帰つてくるとみんな思つていたさ。竹やり訓練もやつたけど、あれで死ぬわけがないよ、おかしいね。竹はどんなものでもいいさ。黒島には大きな竹はないから、小浜出身の先生が小浜から持つてきたのでないかな。

#### (2) 八重山高等女学校へ

昭和17年4月10日、1年生として女学校へ入学しました。ウチのお父さんは出さないといったさ。しかし、運がよかったというのかなあ。当時、黒島は水不足でよ、お金ができると屋敷に水タンクを造つたさ。水タンクを作る職人はセメントに混ぜる小石が必要だからと、バーキ(笊)一杯で2円の働きしたさ。それをウチは毎日2円の働きしたさ。弟を連れて行って二人で石を担いで、2円もらつては、それを郵便貯金にしたさ。

女学校受験のときは、ウチのお父さんは、西表行って帰つてこない。先生はどんなにしても学校へ行きなさいと勧めるさ。「先生、ウチのお父さん、学校に出さないといふのに」「2千円の受験料あればいいのになあ」「先生、お金はだけどよ、1年生のときから6年間、貯金したのがあるよ」と言うと、あの先生が一生懸命、ウチを自転車の後ろ乗せてよ、家に連れて行った。そして通帳を見たら3千円ある。よし、これから受験料2千円引いて、その日の旅費まで十分ある。それから通帳と印鑑をもつて郵便局にとばしたさ。

それでみんなと一緒に受験できた。ウチだけ受かったさ。試験は、朝行つてその日のうちに帰つてきたから、うちの人たちはみんなわからない。合格してから先生がそのことをお父さんに言つたら、「合格したんだったら、いやとは言わない。出すよ」と言つたので嬉しかった。ウチの姉さん二人も喜んだ。石垣では「いくの洋品店」の二階で下宿するようになった。

### (3) 看護教育

誰がこの戦争、こっちまで来ると思う？空襲から、あれからはあんまり勉強できなかつたよ。ウチなんかの戦争は、見習い看護婦の時から看護術教えんといかんといって、陸軍病院、海軍病院、野戦病院と分かれて、体の強そうな人は野戦病院の軍医が教えた。

十字のカバン提げて、包帯とか持つて学校へ行った。空襲のないときは学校でやつたけど、空襲のあるときは（現在の高校）後ろの墓場で、「軍人は上官の命令は絶対服従すべし」といつて、1から5まで大きな声で言わせたりして。大変ね。

### (4) 野戦病院

ウチなんか女学生は、野戦病院、陸軍病院、海軍病院、3つに分けられたさ。20名ぐらいが野戦病院に行った。場所は開南小学校があったところ。最初は人の解剖からみせるさ。あれを見通したのは5名ぐらい。ウチはなんとも感じなかつた。人のチムククル（肝心）がどこにあるわからないのに。何かやると必死になるさ。勉強しても分かるまでやるさ。だから睡眠不足もする。今でもよ。外科と内科に分けてウチは注射のほう、技術がうまいと褒められて、大尉などはみんなウチがやつたよ。賞状をもらったのはウチ一人。医者の子も二人いるのに、「なんでかウチにくれるか、田舎から来た貧乏者に」と言つたら、医者が言うのに「キヨちゃん、これは貧乏人だからとか、金持ちだからということで上げられるものでないよ。これは患者の信用とあんたの実力と医者があんたを見る見当と、この3の方から見て決めるんだよ」と。あの医者さん「ウチに東京まで行こう」と言つたよ、「看護婦やらす」と。ウチまだ学校だから行かれんさ。そのときウチは信用と言うのを実感した。

大尉が退院していく時によ、「キヨちゃんあんたにお土産くれる」といつてよ、ほんたん飴1箱くれてよ、はあ、嬉しかつたよ。

### (5) 仲間たちと

ウチなんか女学生は、4名ずつのグループだったさ。ウチのお母さんは機織りが上手ですよ、一日一反の布を織つたさ。蚕を養つて糸取りやつたりしてよ。ウチのお母さんよ、蚕の糸ですよ、蚊帳を作つて持たしてあつたさ。だから、ウチなんか4名だけよ、蚊帳に入つて眠つたさ。後から聞いたんだけど、アイちゃんも時々ウチの蚊帳にきて眠つたさ。祖母さんに「蚊にかまれたらマラリアになるから蚊にかまれないようにやれよ」と言つたから、「あんたの蚊帳に入つて眠つたよ」と話したさ。後からアイちゃんが蚊取り線香たくさん持つてきたのは、あの時のお返しさ。一人はマラリアで亡くなつたよ。マラリア熱は40度以上出るでしょう。みーんなマラリアに罹つた。

### (6) 兵隊たち

兵隊たちには可愛がつてもらつたさ。田んぼにエビがいっぱいいるでしょ。これを捕つて炊事軍曹のところにもつていつた。そしたらそれをおいしく炊いてくれて、「キヨちゃん、ハイもつて行け」と飯盒にいっぱいいくれて、嬉しいかつたあ。デンブンを食べるときは薬軍曹に砂糖をもらつたし。ま

た、あの炊事軍曹は草履を編むのが上手。あのとき、藁がたくさんあったからね。4つ編んでくれた。はあ、嬉しいかった。だけどよ、目の前で人を殺しても罪ないね。棒で打つたりしてよ、大変。おんなじ日本人なのに、ウチそれ見たときよ、戦争って汚いなーって。なんどよ頭があり話も出来るのに・・・。何があったか分からぬけど、上官の命令を聞かなかつたはずよ。こんなことやって、正々堂々と言うでしょう。汚いね。

#### 4. 戦後70年体験座談会

◆日 時 2015年6月17日午後2時から

◆場 所 ホテル日航八重山

◆記 録 玻座真 武、飯田泰彦

◆参加者 我謝信子、森田芳子、當山ふじ子、玉宮悦子、宮良益子（以上、当時小学6年生）、津田 徹、我那霸政子、金城信子、東舟道初枝（以上、当時小学2年生）

津田 徹 黒島に昭和20年6月18日に初めて飛行機が飛んできて、バラバラと機銃掃射があった。宮里の西の空から飛んできたので、友軍だと思って喜んでいたが、みんな驚いて大騒ぎとなつたさ。生まれたばかりの赤ちゃん（妹）は避難小屋に逃れた。

チエ子兄弟は隣の平得屋（ビシャヤ）の防空壕にいたが、自分達の防空壕がいいからと言って、兄弟みんな走つていったのがぼくたちとの別れだった。

最後に軍隊が島の牛を処分していたので、文句を言うと、牛はみな同じで自分の牛とわかるかと聞き直っていた。自分の牛は分かるから、これは大変だと。あとでフズマリの西側で宮里村は牛の肉を焼いたり燻製にして、カサ崎の避難小屋に持っていくようにしたが、それは6月か7月ころかな？

父はサブ（白保）部隊、あのミノカサ部隊の漁労班で、魚を部隊に納める役目であったようです。敗戦から帰つて、みんなマラリアに罹つた。

我那霸政子 小浜島のクバ崎で、私が母と姉に炊事場から防空壕に避難しようとしたとき、米国の飛行機から機関銃の玉がバラバラと飛んてきて、長女姉さんの腕に当たつたさ。血だらけで、病院で腕を切るというので行つたら、軍医はまだ若いから切らずに直そうと言われたから喜んださ。今でも姉さんの腕は少し曲がつているよ。

玉宮 悅子 野底屋と私の家・仲道屋の二家族は、グンカン屋（野底の親父）のサバニでパナリ（新城島）に夕方避難したよ。どうして、パナリ？ 東筋村の多くはカサ崎に避難したよ。

當山ふじ子 私たち前船道屋などは、親戚を頼りに石垣島の於茂登、白水に避難したけど、マラリアに罹り亡くなつた方もたくさんいるよ。

宮良 益子 貞姉さんは高等科1年生で、学校では宮良長義校長や西表真雄先生と学校の書類を持って西表へ行きました。黒島では、母と私が中心になつてきましたが、博兄は兵隊に

なる前の年齢で、島の防衛隊員の時、事故で片腕を失いました。私が忘れられないのは、親戚の仲底の姉さんが学校の小使い（用務員）で、その日は日曜日で休みでしたが、空襲警報で防空壕に入っているとき、近くに爆弾が落ち、その爆風で防空壕の入口がふさがりましたが、側に人がいることが分かり、助けられました。学校では軍事訓練、竹槍訓練ばかりでした。

**我謝 信子** 体育の時間などほとんどが訓練で、特に竹槍訓練は伊古村まで行って大声でやりました。「前へ」「前へ」「ススメ」「ススメ」「ヤー」と。父は、その当時、保里村や島の役職をしていたと思います。保里村のほとんどがカサ崎に避難しました。前底屋の家族は大原北側か、ヤッサ島に避難小屋を造って家族を避難させました。父は、豚を一頭つぶし、肉は塩づけや燻製にして食べました。食べた骨を捨てるとき猫がどこからとなく集まつてきました。今思うとイリオモテヤマネコであったかも。その後、母と妹はマラリアに罹り、父は家族を黒島に呼び寄せました。

**森田 芳子** 前内野の伯母さんは、うちの母の妹で武、博、愛ちゃんは従姉妹で、末っ子の昇ちゃんが生まれて、間もなく亡くなられました。ばあちゃんが七名の子供の面倒を見ておられました。その時、長女初ちゃんは芋ほりに畑へ、ばあちゃんは用事で隣村の仲本村へ急いで帰って来たら、言葉にも表せないありさまでした。フズマリの西のヤラブ林に運んできたときは、チエ子は血だらけで「痛いよ、痛いよ」とかすかな声で、間もなく息を引き取りました。黒島での六人兄弟の戦争犠牲は、島中がショックを受けた大事件でした。

**東舟道初枝** 東筋村はカサ崎の東側から古見村側で、西北側は宮里村が暮らしました。保里村の人々とはあまり交流はなかったように記憶しています。甘水が出るダイバグムン（すり鉢のクムリ）からの水汲みは順番を待って、潮の干潮時でないと汲めないと大変だったですね。

**金城 信子** 私の祖父は、日露戦争に参加され、一番座には表彰状がありました。兄は武（坡座真武）の兄と同窓生で少年兵として於茂登、白保で従軍しました。そして訓練中に宮良坂下のヤラブ林の中で、米国の飛行機から機銃を受け、玉が兄の首からお腹を貫通して亡くなられました。

## ▽資料紹介

## 波照間小学校沿革誌②

「波照間小学校沿革誌」の翻刻について、一八九四年（明治二七）から一九二六年（大正十五）年までを、「竹富町史たより」（第三七号）に収録した。本号（第三八号）では、前号に継ぐ資料を「波照間小学校沿革誌②」として、十五年戦争の契機となる、満州事変（一九三一年）までを一区切りと考えて取りあげ掲載することにした。「凡例」は前号に基づくものとする。

昭和二年三月三十一日

訓導兼校長富川盛正大濱尋常高等小學校訓導一轉任

昭和二年三月

代用教員依頼退職

昭和二年三月三十一日

登野城尋常高等小學校訓導

黒島善芭當校訓導兼校長任命

全日

鳩間尋常小學校代用教員

波名城静江當校教員任命

全年九月

訓導伊志嶺安甫登野城尋常高等小學校へ轉任

全年全月

小浜尋常高等小學校訓導石垣孫亨當校訓導任命

昭和二年九月

児童數八年々増加シ既ニ式百四拾名ニ垂トスルニ反シ運動場余リニ狹隘ニシテ不便ヲ感ズル事甚ダシ現在敷地ノ東部約口坪ノ民間所有畠地ノ寄附ヲ受ケ男女学民ノ熱烈ナル後援ト努力寄附ニヨリ約一月ノ時間ト延人員一千人ヲ要シ漸ク俊成セリ

當時直接責任ヲ負ヒシ當字總代名ヲ左ニ記ス

總代 小字外 保田盛山田

全上 小字前 保久盛松

昭和三年三月二十日

高卒	男		
尋卒	女		卒業生ヲ出ス
	男		卒業生ヲ出ス
	女		

昭和三年四月

當校訓導宮良賢貞 黒島小學校へ轉任

全年三月

慶世村英診當校訓導拝命

全年全月

白良尋常高等小學校訓導島袋全利

当校准訓導二來任

全年九月

代用教員玻名城長好依退職

昭和四年一月十日

訓導玻名城靜江島尻郡高嶺尋常高等小學校へ轉任

昭和四年三月二十八日

高等科卒業生	男		
尋常科卒業生	女	男	
	女		

昭和四年三月三十一日

訓導兼校長黒島善包石垣尋常高等小學校訓導任命七ノ下五十九円

全年全月全日

石垣尋常高等小學校訓導大演信光 当校訓導兼校長任命七ノ下五十八円

石垣尋常高等小學校訓導宮良高清 當校訓導任命四十三円

宮良幸司当校事科訓導任命七ノ下二十八円

昭和四年四月十日入學式舉行新人兒童 男十二 高等科 男十八

女十六 女七

### 本學年度學級編成並教員配置

種目	學級	本校	第一學級	學級			在籍兒童			職名	月俸額
				男	女	計	男	女	計		
計				"	"	"	"	"	"		
六	五學級	"	"	"	"	"	第一學年	第二學年	二五	訓導	宮良高清
	六學級	"	"	"	"	"	第五學年	第六學年	八	訓導	島袋全利
	七學級	"	"	"	"	"	第四學年	第三學年	三三	准訓導	慶世村英診
	八學級	"	"	"	"	"	第二學年	第一學年	四五	訓導兼	大演信光
	九學級	"	"	"	"	"	第一學年	第一學年	五	校長	石垣孫亨
	十學級	"	"	"	"	"	第一學年	第一學年	四	專科訓導	宮良辛彌
	十一學級	"	"	"	"	"	第一學年	第一學年	一	專科訓導	四人
	十二學級	"	"	"	"	"	第一學年	第一學年	一	准訓導	一人

全年七月十六日

創立二十五週年記念式舉行式後兒童ノ學藝會祝賀會字民ノ餘興等アリ字民總出ノ盛況ヲ極

全年十二月二十一日年未賞與左記ノ通り發令

賞與總額一三九圓

賞與額	職名	氏名
四一円	訓導兼校長	大演信光
三〇円	訓導	宮良高清
二五円	全	慶世村英診
一七円	全	安室孫亨
一五円	專科訓導	宮良千昌
一一円	准訓導	島袋全利

昭和五年三月二十八日卒業式舉行

高等科卒業生	男	八
尋常科卒業生	男	一四
	女	二三
高等科成績受賞者	男	四
	女	六
尋常科成績受賞者	男	二五
	女	二〇
高等科出席受賞者	男	三
	女	五
尋常科出席受賞者	男	四九
	女	四四

昭和四年度經費豫算額

項目	給 料	雜 紙	需 要 費	將 勵 費	修 續 費	計	兒 童 一 人 割 当
	二八八四円	二四四円	二二〇円	六円	二〇円	二三三四円	二三円七二錢

昭和五年四月七日

入學式舉行

尋常科入學兒童數 男 一二三 女 一二四 高等科入學兒童數 男 一四 女 八

昭和五學年度學級編成並教員配置表

學級	學年	在籍兒童			職名	氏名	月俸額
		男	女	計			
第一學級	尋常科第一學年	一六	三一	四七	准訓導	島袋全利	二八円
第二學級	" 第二學年	一四	一五	二九	專訓	宮良吉ヨ	二八円
第三學級	第三學年	二〇	二三	三三	訓導	宮良高清	四三円
第四學級	第五學年	一二	一四	二四	三九	慶世村英診	四三円
第五學級	第六學年	二三	一五	三八	二四	安室孫亨	三七円
第六學級	高等科第一學年	一四	七	二二	校長	大濱信光	五八円
		二三八	一四	二四	訓導兼		
		二二四	七	二二	專科訓導	一人	
		二五一	二	二	訓導	一人	

昭和五年四月九日

校規第十一節兒童學業成考査第三條ノ一項評語價

一〇、九、八ヲ甲 七六五ヲ乙、四三ヲ丙、二ニヲ丁ス ヲ

一〇、九、八ヲ甲 七六ヲ乙、五四三ヲ丙ニニヲ丁スニ改ム

昭和五年九月三日

訓導慶世村英診八月三十一日附ヲ以テ休職

昭和五年九月四日

登野城尋常高等小學校訓導宮良安宗當校訓導任命

昭和五年九月二十九日

飛行機、軍艦、其他一般ノ見學、目的ヲ以テ高等科兒童男二十八名、女十四名 宮良高清

宮良安宗面訓導引率ノ下二六日間（十月四日歸校）ノ見學旅行ヲ爲ス

昭和五年十一月三日

明治節式舉行後學校兒童男女青年團聯合大運動會舉行

昭和五年十二月二十五日

年未賞與左記ノ通り發令 賞與德學一一六圓

賞與額	三五円	職名	氏名	備考	
				二二	一七
一〇	一〇	訓導兼校長 訓導 尋常科訓導 專科訓導 准訓導 休職訓導	大演信光 宮良高清 宮良安宗 安室孫亨 宮良千昌 島袋全利 慶世村英珍		

昭和六年三月二十八日卒業式舉行

高等科五回	尋常科三二回		性別	前年度以前		前年度	本年度	計	總計
	男	女		男	女				
			男	二七〇		一四	一三	二三	
			女	二五四		八	八	一五	
			男	三七		八	七	一四	
			女	一七		八	八	一五	
			男	二七		七	七	一四	
			女	八		五九	三二	三〇七	
			男	八		九一	五八九	五八九	
			女	八					

受賞者數

計	尋常科		性別	成績受賞者		精勤受賞者	本年度	計	總計
	高等科	尋常科		男	女				
計			性別						
			男	一五		四八			
			女	一四		四〇			
			男	二		五			
			女	四		九八			
			男	一		五			
			女	三五		九八			
			男	四		五			
			女	三五		九八			

昭和五年度本校經費豫算額

項目	昭和五年度	給料	雜給	需要費	獎勵費	修繕費	計	兒童一人割当
差引	昭和四年度	二八八四円	二四四円	二二〇円	六円	二〇円	二三三四円	二三円二三錢
		二五六〇円	二五三円	二二〇円	六円	三〇円	三〇八九円	二三円七二錢
		二六四円	△ 九円			△ 一〇円	二四三円	△ 五一錢

昭和六年四月三日

三月三十一日附ヲ以テ左記ノ通り發令

休職波照間校訓導 慶世村英診

任登野城校訓導九給上俸當分四十二円給與

波照間校訓導 宮良安宗

九給上俸給與依願退職

大嶽寛宏

波照間校代用教員ヲ命入月俸金貳拾圓給與

昭和六年度本校經費豫算額

項目	昭和六年度	給料	雜給	需要費	獎勵費	修繕費	計	兒童一人割当
差引	昭和五年度	二九八二円	二四四円	二二〇円	六円	一円	二四五三円	
		二八四四円	二四四円	二二〇円	六円	二〇円	二三三三円	
		二三八円	△ 一九円			△ 一九円	二四三円	

昭和六年四月六日

入学式舉行新入學兒童數左記ノ通り

	尋常科	性別	
高等科	男	男	二〇
	女	女	九
	四	一八	一八

學級編成並教員配置表

種目	學級	學年	在籍兒童			職名	氏名	月俸額
			男	女	計			
計	"	"	本校	第一學級	尋常科 第二學年	二一	二一	
六	第六學級	"	第二學級	"	第二學年	一五	一五	
	高一	"	第三學級	"	第三學年	一二五	二五	
	二	"	第四學級	"	第四學年	一九	一四	
		"	第五學級	"	第五學年	二五	二二	
			第六學級	"	第六學年	六	三八	
			高一	"	第七學年	一四	二四	
				"	第八學年	一七	二二	
					訓導	三八	三二	准訓導
					代用教員	三八	三三	專科訓導
					訓導兼	六	二三	準訓導
					校長	一七	一七	專訓
						訓導	一七	代用教員
						大演信光	一八	一人
						大嶺寛宏	二〇円	三人
						宮良高清	四三円	
						安室孫亭	三七円	
						島袋全利	二八円	

昭和六年七月

本年ヨリ夏季休暇自七月十一日至八月三十一日

## 竹富町史の刊行物一覧

No.	書籍名	発行年度	税抜価格
1	竹富町別巻② 竹富町史文献目録	1990年度	
2	竹富町史 別巻③ 写真集「ぱいぬしまじま」	1992年度	¥2,500
3	竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」	2004年度	¥2,500
4	竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」	2001年度	¥2,500
5	竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」	2005年度	¥2,500
6	竹富町史 第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」	2006年度	¥2,500
7	竹富町史 第十巻資料編「近代5－波照間島近代資料集」	2009年度	¥2,500
8	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」	1993年度	¥2,000
9	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」	1994年度	¥2,000
10	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」	1996年度	¥2,000
11	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成IV」	2000年度	¥2,000
12	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成V」	2002年度	¥2,000
13	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成VI」	2003年度	¥2,000
14	竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」	1995年度	¥3,000
15	竹富町制施行50周年記念誌 「ぱいぬしまじま50」	1998年度	¥2,500
16	竹富町史 資料集① 「鉄田義司日記」	1999年度	
17	竹富町史 第二巻 竹富島	2011年度	¥3,000
18	竹富町史 第三巻 小浜島	2011年度	¥3,000
19	竹富町史 第五巻 新城島	2013年度	¥3,000
20	竹富町史 第六巻 鳩間島	2014年度	¥3,000

# 編集後記

竹富町史編集事業の中心となる「島じま編」の刊行も、『竹富町史 第六巻 峩間島』（2015年）で4冊目となりました。事業を進めるなかで、竹富町史編集委員会では歴史や文化の記録のみならず、これらの成果を共有し、積極的に島づくりに活かしていくことが議論されました。

そこで峩間島編専門部会から、発刊したばかりの『竹富町史 第六巻 峩間島』についてのシンポジウムが提案され、このたび実現する運びとなりました。そして、『竹富町史だより』〈第38号〉は、その「第1回竹富町史島じま編シンポジウム『竹富町史 第六巻 峩間島』」（9月18日開催）に合わせて、峩間島特集を試みた次第です。

シンポジウムの講師の一人、得能壽美氏は近代以前の八重山の人々にとって、通耕こそが生活基盤であったということを、峩間島をモデルとして検証されています。八重山の歴史を考えるうえで重要な提言であるかと思います。本号へは講演資料として「近世峩間島の民衆生活と通耕—『竹富町史 第六巻 峩間島』の知見を加えて—」をお寄せいただきました。講演とあわせてご覧ください。

また、民俗学者・宮良高弘氏寄贈資料のなかから、峩間島に関する写真をピックアップし、キャプションを付して提供することができました。

本号は、峩間島に関するもののほかにも、「戦争と黒島」（玻座真 武）、「〈資料紹介〉波照間島小学校沿革誌②」など、盛りだくさんの内容となっております。

尚、3頁のシンポジウムのプログラム（チラシ）には、写真家・新井優氏より峩間島の空撮、峩間灯台の写真を提供いただきました。ありがとうございました。

竹富町史編集事業が島づくりの一助となることを願ってやみません。

2016年9月18日発行

## 竹富町史だより 第38号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-82-6191

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp